我國建壇受戒の權輿なりと、斯くて同八年聖武孝謙兩帝の勅願によつて當寺の工を起し、天平寶字三年八月に至つて漸く成る、時に孝謙帝親しく宸筆を以て唐招提寺の四大字を額に書し登へり、爾來旺盛を極め、緇徒三千、常に學窓を連ね、寺基四丁外に四十八院を西山に構え、其院に各々數坊を存して海外無双の僧苑となし、律宗唯一の本山として西大寺衰頽の後には七大寺の一に加へたることすらありしが、其後戰國の世に遭遇して殆んど廢頽せんとするに當り、德川氏往時の由緒を追想して戒壇堂を再建し、各堂に修理を加へ、舊觀に復したるも、偶ま維新の革命あり、即ち現境内一萬一千餘坪を殘す餘は盡く上地に歸し、後、明治十八年保存資金として千五百圓を、同三十一年金堂修繕費として二萬六千七百圓を、同三十八年構堂修理費として貳萬八千餘圓を下賜され、是れ

によつて寺に千古の名刹を維持し風致の幾部を存するを得たり、法相宗の大本山たる**藥師寺**は是れより近く大字西の京にあり、白鳳八年、天武天皇の皇后、御病に惱ませ給へるより天皇、僧作蓮を召して平癒を祈らせ給ひしに靈驗顯著なりしかば藥師佛丈六の金銅像を鑄し國内、高市郡岡本鄕に大伽藍を草創し給はんとせられしも工成らざるに崩御の御事あり後、文武天皇の御代に漸く竣成し、頗る輪奐の美を極めしが、元明帝の御時御奠都の御事あるや當寺も又現今の地に移され、聖武帝の御代に至つて造營全く成れりと云ふ、是又七大寺の一として法燈盛んなりしも後屢々厄災にかゝり、慶長五年再興したるものにして今は當時の建造物中、三層塔を殘すのみ。

停留場に戻りて北に向ふこと八丁、平城村秋篠に有名なる**秋篠寺**あり、

寺は光仁、桓武兩帝の本願にして寶龜十一年、善珠僧正の開基にかゝり勅封一百戸を賜はれる大伽藍なりしが、爾來兵火の爲めに灰燼に歸し今は僅かに構を殘すに過ぎず。

長き夜やいこまおろしや寒からん　壬二

秋篠のさとに衣うつなり

是れより東方十數丁に法華寺、海龍王寺、不退寺等の名刹を初め、大極殿址、神功皇后、孝謙、成務、平城諸帝の御陵あり。

電車は是れより尙も東に走りて奈良驛前（關西本線奈良驛より二丁北方）を經て奈良停留場に着く、奈良市の名蹟は前項に述べたれば「奈良の古都」の項參照すべし。

四條畷神社參拜

四條畷神社は小楠公の靈廟なり、父公正成の意を亞いで二代の恪勤を盡せし、南朝の忠臣、楠正行を祀る處、英靈遠く去つて靑苔歲を重ぬること深しと雖も、楠の香りは長へに傳へて愈よ芳ばし。

因みに、小楠公奮死の地及び其英靈を鎭めし墳塋の地に就いては異說あり、卽ち前項百五十六頁所載の說眞に近きが如しと雖も、四條畷神社は其靈廟として創營されし處なるを思はゞ亦神威重かるべし。

汽車は片町線により四條畷驛に下車すべし、片町線は大阪城の東方、片町にありて城東線京橋驛にて接續す、京橋驛は湊町より六哩三、大阪驛より二哩六、四條畷驛は京橋驛より七哩六、片町よりは八哩二、乘車賃

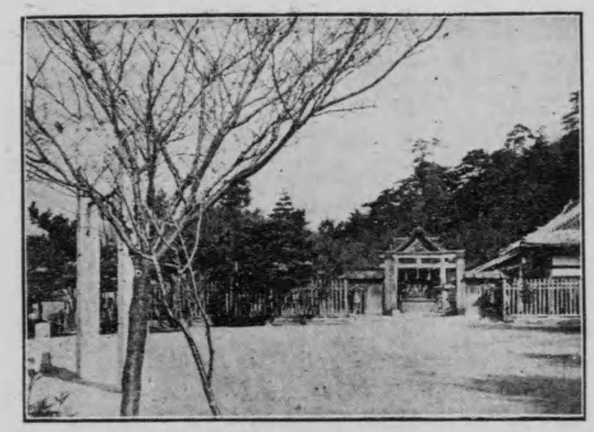
金片町驛より十八錢、京橋驛より十七錢、湊町驛より三十錢、大阪驛より廿三錢。

運轉時間は片町より四條畷迄約四十分、片町、京橋間は三分の差あるのみ、城東線は下り列車、即ち大阪發湊町行の列車は本線の往路に接續し、上り列車、即ち湊町より大阪行の列車は歸路に接續するを以て城東線によるならば大阪驛方面を出發點とする方、京橋驛にて乘換の待合時間尠し。

片町を發したる列車、京橋、新喜多、放出、德庵、鴻池新田の諸驛を過ぎ、住道驛より左方に曲りて進むに從ひ、右方の東窓より近く飯盛山の翠巒を望み、翠巒中稍北方斜に壯重なる社殿を遙かに見るべし、是即ち四條畷神社にして汽車の進むと共に社殿は次第に近づきて、野崎驛を過

ぎ右方直角となるに及んで停る處、四條畷驛とす途次、驛の北方に近く**小楠公の墓**あり、老樟の蔭に建つ、高三丈五尺にして贈三位楠朝臣之墓と刻し、別に南無權現と鐫せし小碑あり、地は正行戰死せし所、墓は往古より傳はるものなりと云へど、六萬寺も戰死の地を傳へられ（鳴川詣での項參照）何れとも定かならず、記して識者の敎へを待つ。

楠公夫人の墓は小楠公墓碑の傍にあり、明治三十五年、華族女學校學監たりし下田歌子等の建つる處、夫人はお久の方と云ひ古來賢母の鑑として傳へらる、其兄は正成に從ひて湊川にて討死したる備前守正忠なり、正成の死後、夫人は正行を誨へる處深かりしが、正行戰死の後薙髪して尼となり、其領內の南鄕に草庵を結び、一族の冥福を祈り正平十九年七月沒すと、庵は時人南妃庵と稱へしと云ふ、址は今尙存せり。



四條畷神社

四條畷神社は其墓側より東方一路楓樹に擁せられたる賽路を辿ること五丁、山麓より石階一百級を拾ふて初めて達す、社は別格官幣社にして明治二十二年の創營になり正行及び其一族を祀る地は考樹鬱蒼たる飯盛山に據り、境内に櫻樹と躑躅あり、神域高燥なれば其眺矚甚だよく、攝河泉の三國、播但の諸峻嶺、淡路島は水天髣髴の間に隱見し壯重にして、壯嚴なる社殿と相俟つて殊の外趣深し、正行の從弟にして四

條畷の戰によく奮鬪して遂に敵刄に倒れたる**和田賢秀の墓**は是れより北三丁、甲可村字塚脇にあり、禪宗の名刹**龍尾寺**は是れより東北方數丁同村大字南野の東茶臼山の半腹にありて俗に茶臼山觀音と云ふ、初め僧行基の開基にかゝり、一時廢寺となりしを寛永年間再興し本尊には佛師春日作、三尺三寸の十一面觀世音を安置せり、其賽路に石階重疊し、境内に達すれば眼界忽ち展け西大阪市街を隔てゝ茅渟の海を望み、遠く雲煙の裡に播備の連峰を望み得、**權現の瀧**は此の山中にありて落下五十尺鞴鞴の響山谷に震ひ、盛夏來遊すべき一仙郷たるを失はず**清瀧**は南野の北方三丁、大和に通ずる間道、清瀧嶺の西麓にあり、直下四十五尺を有し山中奇石怪岩峙ち、楓樹多くして附近極めて幽邃なれば夏季より秋季に亘りて遊ぶべし。

以上は四條畷より北方に亘る名蹟勝地を述べたるも日長の春時なれば其行路を逆にとり四條畷神社より尚南方に歩を移して野崎觀音に參詣し野崎驛より歸路に就くか、或は往路を野崎驛に下車して同觀音より北方に及ぼし前記の順路を辿るも可ならん、然れども一日の遊杖として稍難きの感無きにあらざるを以て本編には野崎參りと項を改めて次ぎに述ぶることゝしたり。

含涙慇懃辭業闕　誓將一死定中原　箕裘未繼多年恨　第士長懷往月恩
老樹幾枝從北折　殘得半面回南存　但憐寂寞秋山裏　無復捷書聞至尊

靜　區

野崎參り

飯盛山の山腹、四條畷神社の社殿より右方に稍隔たりて伽藍のあるを車窓より望むべし、是れ俗に云ふ野崎觀音にして、是れに賽するには野崎驛に下車するをよしとす、驛より五丁、寺は福聚山慈眼寺と號し、其創建の年月詳かならずと雖も一千餘年の昔、天竺波羅奈國なる觀音を模したる古刹なりと、後、龜山天皇の御宇、大僧正實慶、秦氏と力を合せて大に殿堂を修補せしに永祿年間兵燹に罹り、再び頽廢せしを數年の後更らに工を起して漸く再建するに至りしは、現今の堂宇なり、毎年五月一日より十日迄無緣經を修行し、野崎參りと稱へて大阪より參詣する者寢屋川の堤に沿ひ舟により、陸なるは乘船の客を、舟中なるは陸上の徒

歩者を互ひに嘲弄し罵詈して以て至る奇習古來より行はれ、今は汽車の便によるもの多けれども、尚此奇習を存す、陸路行程三里二十八丁・四條畷神社は此の山麓に沿ひ北に行くこと十數丁にて至るべし、途次**飯盛山古城址**あり、址は其形、飯を盛りたるが如き山容の山頂（飯盛山の名是れより起りしも、今は此附近の連山を飯盛山と稱ふるに至れり）にあり、建武年間僧正憲此處により、楠正成攻めて是れを取り後、正平三年高師直此城により、又畠山の家臣も陣せしことあり、永祿年間には三好長慶の居城となし、元龜年間、遊佐信敎、畠山昭高を輔けて城を守り、天正四年遊佐は織田氏の爲めに攻められて遂に滅ぶと、今は僅かに壘壁の跡を殘すのみ。

轜棹輕舟村岸横　兩三分隊上堤行　舟中堤上呼相答　里孤蘆夕陽明　賴山陽

倉治の桃林と源氏の瀑浴

地は北河内郡交野村大字倉治にして、**桃林**は片町線津田驛附近の地、其數實に五萬株を越え、花季に至れば滿目只だ紅雲の靉靆するのみ、車窓より此の眺矚を恣にするを得べきも、更らに山麓に歩を延ばせば武陵の昔を繰返すの思ひあらしめ頗る壯觀なり、春時は料亭、茶店等夥しく設くれども、物價廉ならざれば遊客は豫め行厨を用意し、座席をのみ借ること、なれば宜しかるべし。

乘車賃金は片町驛より津田驛迄三十錢、京橋驛よりも同額、大阪驛より三十六錢、湊町より四十三錢、往復ならば各倍額より片道の通行税一錢を引く。

源氏の瀧は一に元寺の瀧とも稱へ津田驛の東南方十丁餘なる交野村大字倉治に屬する交野山の麓にあるより又た倉治の瀧とも云ふ、直下三丈餘綠樹鬱蒼たる間にかゝり水清冽にして水勢激しからざれば夏時瀑水浴の好適地として婦女子も浴すべく、亦た附近に楓樹頗る夥しきを以て秋葉霜深き頃に至れば滿山錦繡の裝ひを凝して甚だ麗し、殊に先年來土地の有志等によりて保勝會の設けあり、瀧の畔に休憩所を設けて外遊者の爲めに諸般の便宜を計れるのみならず瀧見茶屋及び數軒の旅亭等あるより盛夏の候に至れば京阪地方より避暑の爲め滯留の客夥しく晩秋の季に觀楓の遊者甚だ多し、懸崖の中腹に不動尊を刻せる不動岩あり、昔時開元寺と稱する巨刹のありし處にして瀧の名を元寺の瀧と稱するも之れに因るとか、亦た其途次、石階を登りたる左傍には**清正寺**と號する古刹

あり、眞言宗にして聖觀世音を安置す。

桃と瀑共に一日の遊として尙且つ飽かざるの思ひあらんも歸路、時間の餘裕あらば星田驛に下車して獅子窟寺の名刹及び山中の奇勝を探るも可。

但し津田迄の行としては途中下車出來ざるを以て若し下車するとせば、乘車券を買次ぐか、或は此行多少の時間を要するを以て別に出かくるも可なるべきか、乘車賃金は星田津田間片道八錢、片町星田間二十四錢、京橋星田間二十三錢、大阪星田間三十九錢、湊町星田間三十六錢。

獅子窟寺は星田驛の東方約二十丁、岩船村の東、普見山の山腹にあり、途次星田村より右して先づ**妙見の祠**に賽すべし、地は星田驛の東方約半里、天の川の南岸に聳ゆる妙見山の山嶺にあり、三個の巨石を以て神體となし、前に拜殿あり、山は高からざれども峻坂山麓より通じ、嶮なる

こと恰かも梯子をかけたるが如し、山麓に櫻樹夥しく、山上に清澄玉の如き明星水龍あり、甚だ大ならざれども懸崖より落下する素簾、幽邃なる附近の風致と相俟つて頗るよし、獅子窟寺は是れより直路行くべしと雖も道程極めて嶮なれば再び星田村に戻り、左して私市村を經て至るべし、寺は聖武帝の御宇、僧行基勅を奉じて草創し、自作の藥師佛を安置す、後、天長年間弘法大師此の山に錫を止め佛眼明妃の法を修せしことあり、それより五百年、漸く廢頽に歸せしを、龜山天皇偶々此處に臨幸あり、御惱平癒の祈願ありしに其靈驗著しかりければ勅して堂宇を復興せしめられ以て今日に至ると、寺域は山腹を切開きたるものにして崎嶇たる石磴西より通じて賽路をなし、山容既に奇なるが上に本堂脊後なる獅子の窟の洞窟を初め觀音巖、德雲石、大黑岩、笈掛石、鏡石、龍石等

の奇石皆山中に散在して奇觀を極め、山上の眺望又甚だよし、此地に至る途次私市村より直路大和に通ずる間道を辿ること二十餘丁、天の川の上流に石舩巖あり、巖は高さ三十餘尺、長さ五十尺に餘る巨巖にして、巖容恰も船の如きを以て此名をなす、急湍なる天の川の溪流は此の巖脚に激し飛沫雪と散つて頗る壯觀なり、里人是れを住吉明神と稱へ、毎歲六月巖前に於て祭典を行ふ、其傍に四個の佛体を刻せる岩彫佛あり。是れより歸路につき、星田驛の西南方數丁、水本村字打上に至れば明光寺の名刹あり、草創の時代は詳ならざれども、大念佛宗にして春日作一尺八寸の阿彌陀佛を本尊として安置し、寺後の岩面に十三佛の石像をおき別に奇石あり、弘治三年丁巳九月可信と刻す、又是れより奥、一丁許りの地に石の寶殿と稱ふるあり、或は石棺を發きたるものならんか。

木津まで

（片町線津田驛以東）

片町線の終點驛にして、關西本線及び奈良線の接續線たる木津驛に至る區間、長尾、田邊、祝園の三驛あれども、其沿線には殊更ら探るほどの地はあらず、されど木津驛に至る途次時間の餘裕あらば途中下車規定に準じて下車するも可なり（片町木津間に二回下車するを得）卽ち夫れ等の人の爲めに强いて名蹟の地を擧げんか、長尾驛の東南三丁に**博士王仁の墓**あり、王仁は應神天皇の朝、聘に應じて百濟より來朝せる人、墓上に有栖川宮殿下の御染筆になる一碑あり、中將姫の開創になる**明王寺**は是より近く、寺傍の**國見山**を隔てし南方、氷室寺字**尊延寺**に弘法大師作聖觀音及び五大尊を安置せる**尊延寺**あり共に眞言宗の名刹とす、片町驛

より乘車賃金三十四錢、京橋驛より同額、大阪驛より哩程十八哩八、乘車賃金三十九錢、湊町驛より四十六錢、往復賃金は各倍額より通行稅一錢を引く。

薪一休寺は田邊驛の西七丁、田邊村字薪にあり、康正年間大德寺一休禪師の建立に係り同禪師の居住せし處、初め此地に大應國師の開基になる妙勝禪寺ありしが、廢頽に歸せし後一休來つて其址に一宇を建て酬恩庵と名けしも、里人一休禪師の德を慕ひ、且つは地名の薪をとつて薪一休寺と稱ふるに至れり、一休の自作になる其鬚髮を植ゑたる像を安置し、一休の所持せし笠杖を藏め、堂の東南方には一休の遺骨を埋葬せし地あり、覆ふに塔宇、石塔を以てす、片町より田邊驛迄二十哩四、乘車賃金四十二錢、大阪驛より四十七錢、京橋驛より五十四錢。

此外武内宿禰の創建になる**酒屋神社**は田邊驛の西南十丁にあり、楓樹多く、**祝園神社**は祝園驛の東北約半里にあり。

汽車は祝園驛を過ぎて木津驛に至る、木津驛附近の名蹟は既に關西本線の項に述べしのみならず、其足らざるは項を更め次きに奈良線の部に述ぶることゝしたり。

見し人も忍が岡の花すゝき　　夫木集

なびくは招く心地こそすれ

木津より長池まで

本項は奈良線の南半なり、長尾驛より以北、宇治を經て京都に至るべしと雖も、大阪より來りて本線に接續する鐵路は南方には奈良より木津まで同一軌道を辿る關西本線あり、北端京都にては東海道線あり、稍北方に偏したる宇治驛には京阪電車の接したりと云ふを得ざるも驛に近く來れるあり、又木津には片町線と合し、同線田邊驛と本線の長池驛とは中に木津川の清流を挾んで隔つること一里餘に過ぎざれば春秋の季、健脚の人ならずとも散策をかねて行くべきを以て、關西本線及び片町線（田邊、長池間徒歩）にて探ぬべき名蹟を茲に掲げ、長池以北宇治迄、宇治以北京都までは別に項を更めて述ぶることゝしたり。

尙念の爲め…　關西本線によるには奈良まで特定割引乘車券により奈良より更らに目的地迄の乘車券を購求すれば比較的低廉なり、卽ち奈良より長池に至る中間各驛迄の哩程及び賃金を擧げんに（賃金は三等にて通行稅共）

奈良より木津迄四哩四分十錢□同上狛迄五哩四分十二錢□同棚倉迄七哩二分、十六錢□同玉水迄九哩一分二十錢□同長池迄十二哩三分二十六錢（區間賃金は各其項に記す）

右　片道にて往復なれば各二倍したる內より通行稅一錢を引くものにして是れに大阪奈良間の乘車賃金を加算すれば可なり、又片町線によるには田邊驛までの賃金は前に述べたるを以て長池以南木津迄の乘車賃金を述べんに（是又通行稅共）

長池より玉水迄八錢□同棚倉迄十二錢□同上狛迄十五錢□同木津迄十七錢、區間賃金は各其項に記す

同區間の各驛は哩程短距離にして途中下車規定に準ずべからざるを以て各驛に下車するとせば乘車券を買ひ次ぐべし。

木津驛附近は先に述べたれば茲には省き、次驛上狛驛に至れば其西南七

丁、上狛村新在家に**木津の地藏**として有名なる**泉橋寺**あり、本尊には惠心僧都作地藏菩薩及び脇士に聖觀音を安置し、又門外に行基作の長八尺に餘る座像の石地藏あり、**神童寺**は同驛の東北約十丁、高麗村字神童子にありて一に金剛藏院と云ふ、眞言宗にして藏王權現を本尊とし、創建の年代詳ならずと雖も現今の本堂は應永年間の古建築物なりと云へば有數の古刹なること推するに難からず、因に驛の所在地、上狛の名あるは上古此地に住せし百濟國の僧惠辨、惠宗の兩名の名付しによる處にして初め狛の里と稱へて是れを上下に別け、惠辨は上狛に、惠宗は下狛に居を定めしと、傳へ云ふ狛の文字は其偏を才とし旁を白としたるは百濟と其音相通するを以て兩僧が此字を以てしたるなりとも云ひ、又コマは高麗に因みたるなりとも云へども只だ聞くがまゝに記す、古へは瓜を以て

名あり、木津驛より一哩、賃金三等片道三錢、往復五錢。

音に聞く狛のわたりの瓜つくり　　捨遺集

となりかくなりなるこゝろかな

蟹滿寺は棚倉驛の北方數丁、棚倉村大字綺田にあり、寺記に云ふ、昔此の附近に慈悲深き士民ありしが其女生れて七歳の時、里人等の蟹を捕へて食用にせんとするを見、惻隱の情に絶え難くやありけん、夫れに代ふるに佳魚を贈りて蟹を放ちやりたり、爾來十餘年を經て其父偶々田圃に出でしに一蛇の小蛙を將に呑まんとするものあるより憐れに思ひ蛇に向つて何氣なく其小蛙を助けやらば我れ汝を婿として我が女を與えんと云ひしに蛇は忽ち蛙を捨てゝ何れとも無く立ち去りたり、然るに其夜蛇は人の姿に化して其家に來り、書の言葉によつて女を求めしより父は前言

を悔ひて痛心限りなく、遂に女に其事を語りしに、女は即ち蛇に向ひ三日の後再び來るべき旨を以てし、俄かに土工を急がして小室を營み自ら是れに屏居す、是れ再び蛇の來るを避けん爲めなりしが、蛇は果して三日の後來り、女の屏居せるを察して大に怒り、大蛇の本體を現はして、其室を襲ひ、蛇尾を以て戸を叩くこと頗る激しかりしも夜の更くるに從ひて次第に其音低く曉明に至つて全く絶えたり、是れを母屋にて聞き居たる父母等は生けたる心地も無く、天全く明けるを待つて僅かに窺へば一疋の大蛇身に數百箇所の創を負ひて倒れ傍らに幾百とも知れぬ蟹の手足を亂離して死し居れる樣子に益々不審に思ひ、中なる女に委細を聞くに女云ふ、室内にありて心治まらざるまゝ豫て信仰する普門品を一心籠めて稱へ居る折柄、長け一尺餘の一つの菩薩目前に現はれ怖るゝ勿れと

告げられしを以て訝しみながら僅かに心を慰さめ尙も一心に普門品を稱へ居る折柄、何邊ともなく夥多の蟹立ち現れ、其蛇に打ち向ひ互ひに激しく爭ふ内、さしもの大蛇も遂に倒れたりと聞いて兩親は大に悅び、一寺を營み是れを蟹滿寺と名けしと、寺は眞言宗に屬し、紫銅を以て鑄したる長八尺の釋迦佛を本尊とし、脇士に二尺の聖觀世音を安置せり、上狛驛より一哩八、賃金三等片道四錢、往復七錢。

色葉集に「山城に井堤の水とてめでたき水の道のつらにあるなり、其水の名を玉水と云ふなり」云々とある**玉水**は**玉水**驛の所在地たる玉水村の北端左傍にある井水なり、玉水の名は水の清冽なるによるは勿論なれども、地は大和街道の一驛とて古往往來の旅人、此の井水に渴を醫すること多きより賞美して名けしに初まり、遂には地名にまで用ひしならん、

井堤の玉川（井出とも書く）は驛の傍を流れて木津川に通ずるものにして一に井堤川と云ひ、古來六の玉川の一に稱へられ山吹の名所たりし處、川は平素水なきを以て俗に水無川の名あり、**玉井寺**は驛の東方五丁、井手村大字井手にあり、律宗の古刹にして寺内の南庭に**玉の井**あり、歌枕にある玉水は即ち是れなりと傳ふる說もありて前に述べたると何れを眞とすべきか定かならず。

冬來れば行手に人はくまねども　氷ぞむすぶ玉の井の水　　千歲集

棚倉驛より玉水驛まで一哩九、乘車賃金三等片道五錢、往復九錢、此地より片町線田邊驛まで西北約一里半。

禪定寺は長池驛の東方約三里、字治田原村字禪定寺にあり、普陀落山と

號け、平宗上人の開基にして、延暦元年關白藤原忠實の創建になる處、初めは華嚴宗に眞言宗を兼ね、南都東大寺に屬して伽藍頗る壯麗なりしも中世荒廢に歸せしを延寶年間月舟和尚之を再興して曹洞宗に改めたり本堂は、圓通閣と稱へ、十一面觀音を本尊として脇士に普賢、文殊の二菩薩及び四天王を安んじ、又本堂の東に地藏堂あり、五尺餘りの延命地藏尊の坐像を納む寺域は山に據りて南面し、後に高峰を負ひて甚だ眺望によく極めて閑雅なり、**地藏谷**は此の西方二丁餘、禪定寺にある延命地藏尊、初め此處にありしを以て此名ありと、**信西の**墓は同寺の附近に、又東北方數丁の山上に歌人**猿丸太夫の祠**あり、往昔猿丸太夫幽棲の地にして百人一首にて名高き「奥山に紅葉ふみわけ啼く鹿の」云々の歌は此の山中にて詠せしものなりと云ふ、若し遠足の準備を整へ此方面にのみ

名蹟を探ねんとならば是れに至る途次先づ田原村大字郷口より道を南に取ること十丁餘同村字名村の巖平山**龍安寺**を訪ふべし、寺は曹洞宗にして道元和尚の開基にかゝり千手觀音を本尊とす、初め此の東南四丁餘の山上にありしも中世今の地に移したるものなるが、舊地には奇岩あり、俗に**大岩ケ原**と云ひ、山上の經塚は開基和尚の嘗て經卷を埋藏したる處なり、此の東南方に山城國七不思議の一として傳へらるゝ**爛栗燒栗の森**あり、傳へ云ふ天武天皇未だ太子たりし時、大伴皇子、兵を出して大和吉野の宮に攻めんとするを聞し召され、太子宮を脱して竊かに東國に遁れられし御事あり、其時此村を過ぎくれしに土民等爛栗及び燒栗を奉献せしを太子は手づから栗を土中に埋め、吾が本懐若し達するとならば此栗芽を萌くべしと仰せられしが、其後皇子の軍は江州の勢多にて敗れ、

自殺せらるゝに及んで太子直ちに天位に卽かれしに、曩に埋められし栗何時か生え茂りて終に森林をなすに至りしなりと、其森今尙存し、毎年實を結び、結びたる實は外皮稍や軟かくして爛でたるが如きあり、又澁皮自ら剝落して燒きたるが如きあり、古へは年々是れを禁廷に献ずるを例としたる由、**天武天皇の祠**は此の森の西南方にあり、以上の緣故により里人等、天皇の御靈を鎭めて造營したるなり。

青谷の梅林は長尾驛の東方約三十丁、禪定寺に至る途次にあり、元より月ケ瀨の大觀に比すべくもあらねど、自然に生ひたちたる老梅古樹枝を連ね、初春の風致甚だ掬すべし、**推尾**の瀧は是れより東北方約十丁、推尾山にあり、古書に唐櫃の瀧とあるは是れなりと。

我肝のながるゝ瀧の落る聲、聞えやすらん推の尾の岸　孫姫和歌式

八幡まで

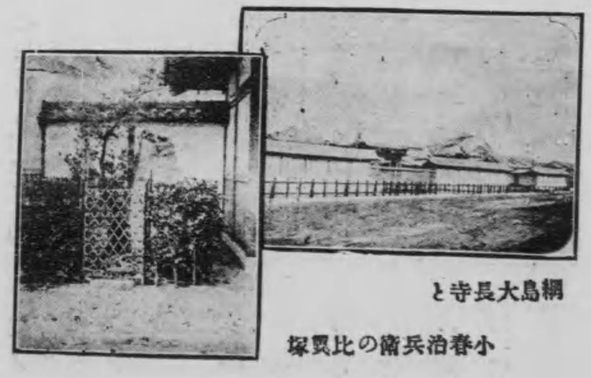
八幡詣では男山八幡宮參りなり、宮は大江の匡房嘗て「昔は萬乘の君今は百王の祖、一天の下、其德輝を戴き、四海の中、其恩澤に靄ふ」と崇稱せし處にして京都府綴喜郡、八幡町の西に接せし男山の山上にあり、大阪よりは京阪電車の便によるべし、京阪電車は大阪市内、天滿橋の北詰に發して京都市及び京都府下宇治町に至る私設電鐵にして、天滿橋停留場より八幡宮の參詣順路驛たる「八幡停留場」に至る區間、京橋、野田橋、蒲生、野江、森小路、守口、門眞、古川橋、萱島、寢屋川、香里光善寺、牧方、牧方東口、牧野、樟葉、橋本の十六停留場あり、天滿橋より各停留場を經て八幡に至る乘車賃金左の如し。

天満橋より＝野田橋及蒲生迄三錢▲野江及森小路迄六錢▲守口及門眞迄七錢▲古川橋及萱島迄十一錢▲寝屋川及香里迄十六錢▲光善寺、牧方、牧方東口迄二十一錢▲牧野及樟葉迄二十六錢▲橋本及八幡迄三十一錢。

線路は京街道に沿ひ、南は河内の平野に接し北は淀川の清流を隔てゝ北攝の連峰を望み、其風光の佳なるのみならず平安奠都以來の名蹟夥だしければ八幡參りの往路或は歸途、時間の餘裕あらば探ぬべし、但し本線は八幡驛を除くの外、途中下車を成し得ざるにより、途次の名蹟地に趣かんには豫め目的の停留場を定めて乘車券を購求する方可ならん。卽ち茲には先づ大阪附近の名蹟地より順次に及ぼして述ぶ。

近松巢林子の作「心中天の網嶋」の小春、治兵衛の名と共に有名なる網嶋の**大長寺**の野田橋停留場の北三丁にあり、地は大阪市に屬す、寺は淨土宗黑谷の本寺にして、慶長年間鯰江備中守の草創する處、以前は是れ

より西南三丁にありしも、先年市の富豪、藤田氏の別莊を營むに際し、寺域を買收して、現今の地に移さる、寺内に**鯉塚**、**比翼塚**の二基あり、鯉塚は寛文八年、土地の漁夫淀川に網して一大鯉魚を得しに其全鱗に燦爛たる巴紋あり、里人之れを奇として水邊に養ひ、衆人に觀覽せしめしが、後死したるを當時の寺僧、請ひ受けて寺内に葬りしに其夜夢中に巴紋の甲冑を纏ひたる一武人枕頭に立ち、我れは今日當寺内に葬られし鯉魚なり、されども前世は魚族にあらず



網島大長寺と

小春治兵衛の比翼塚

過ぐる元和の役に武功をたてゝ討死せし武士なれども、過去の因縁により淺猿しき生を享けたり、然るに今日和尚の懇篤なる引導により、其德を以て成佛することを得たるは悅び此上に過ぎずと禮を述ぶ、僧夢覺めて是れを奇とし、法名を瀧登鯉山と號け冥福を吊はん爲めに一碑を建てしは即ち是れなりと、又比翼塚は小春、治兵衛兩名の爲めに建てしものにして、傳へ云ふ、治兵衛は堺筋の商人、小春は曾根崎新地の遊女なりしが、戀に捕はれたる兩名は次第に深き淵に陷り、遂には身に纏綿する四圍の事情の絕つに由なく、寛保五年十月十四日の夜、互ひに諜し合せて當寺に來り、折柄夜の回向ありしより夥多の群衆にまぎれて法座に連り、人散し夜更け四隣の寂莫たる頃、側に遺書を殘し、用意の短刀にて枕を並べ最期を遂げしを、住職太く憐み「みな人も、南無あみ島のよき

手向け、神や佛の緣にひかれて」の一首を手向け、厚く葬りたり云々と塚は即ち其上に建てしものなり、櫻の宮は北の東北方三丁。

難宗寺は守口停留場の北三丁、守口町の中央にあり、本願寺の掛所にして俗に守口御坊と云ふ、明治元年、明治天皇陛下大阪行幸の際、行在所に定められし名蹟、又此處より近く**盛泉寺**あり、且又其時內侍所に充てられし處にして三種の神器を出入の爲め新に築きし門は塀重門と稱へ今尙存して大門の傍にあり、**佐太神社**は庭窪村大字佐太にあり、寐屋川停留場の西北方約半里、道路平坦なれども此附近人車稀にあるのみ、地は往昔菅公の領地なりしが、筑紫に左遷の時、都の風說早く此の地方まで傳はりしより沙汰と名けしを何時か佐太の文文を以て記すことゝなりたりと、社は里人菅公の德を慕ふの餘り、公の出立の際、作自の像を紀念

佐太神社

として殘されしを齊ぎ祀りたるに初まり再後幾星霜、社殿荒廢に傾きしも寛永年間、時の領主永井尙政、新に社殿を勞みて現今に傳ふと、社域廣濶にして甚だ清淨、社頭に一株の古梅あり、老幹翠苔を裝ふて蟠曲し雅致眞に掬すべし、是れ後水尾天皇より直政に賜ひしを尙政更らに當社に奇進したるもの、名けて勅梅と云ひ、天皇の御製あり。

家の風世々につたへて神垣や
たへたるをつく梅も匂はん

社後に山を築き、池を穿ち、泉石の配置風趣を添えたる神苑あり、杖を曲ぐべく、神苑の彼方に菅相寺あり曹洞宗にして、宇治興正寺の末流に屬して承應元年、淀の城主たりし永井信濃守尙政の創建にかゝり僧方安を開祖とす、世に是れを佐太神社の奥の院となし、菅公左遷の時誓願ありて刻みし觀世音の尊像を安置すと云ふ、又佐太神社に地を隣して來迎寺あり、寺は淨土宗佐太派大念佛宗の本山たる名刹にして康永年間法明法師の開基にかゝり、本尊とする天筆の阿彌陀は五百餘年の間、雄德山八幡(男山八幡)の寶庫に秘藏せられしものなりしを、後醍醐天皇より法師に賜はりしものなりと傳ふ後、村上天皇深く歸依せられて故光殿の稱號を賜ひ勅願所とせられしことあり、寺は初め守口町にありしも、應仁の亂以來兵亂、水災、火難等の爲め移轉すること三十六回の多きに及び

延寶六年、三十世慈光の代に至り、現今の地を卜して遷ると、寺域極めて廣く、空前に老松あり、枝條四方に蔓り、翠葉相交へて笠をなし閑雅なる寺内に風致を添ゆること多し、**蹉跎神社**は香里停留場の東南方三丁、蹉跎村大字中振なる蹉跎林の半腹にあり、菅原道眞公を祀る、初め蹉跎山の麓にありて近郷二十五箇村の産土神たりしが、或年村民等社前座席の爭ひより別に地を相して遷宮せしは現今の社地なり、今は鄕社にして同村大字出

蹉跎神社

口の鎮守たり、社記に云ふ、菅公筑紫に左遷せらるゝ時、息女苅屋姫の心を慰さめられん爲め手づから像を刻みて此地に止められしを、薨去の後社祠を營みて是れを祀り、姫の蹉跎と歎かれしに因り地名を蹉跎村と名けたりと、爾來慶長元和の役に兵燹に罹りしが、神體僅かに無事なりしを以て是れを納めて再興し以て現今に至る、社域廣からざるも社殿は甚だ壯重にして附近森嚴なり、聖德太子の草創にかゝる**龍光寺**は是れより近し、中古僧龍内再興して七堂伽藍輪奐の美を極めしといへど今は殆んど荒廢に傾き只だ有りし面影を偲ぶのみ、**蹉跎山**は蹉跎神社の東方數丁にある丘陵にして、昌泰四年菅公筑紫に左遷の途次此の山上に憩ひて都の方に名殘を惜まれしとも云ひ、又菅公の息女苅屋姫、父公を慕はるの餘り蹉跎して嘆かれし處なりとも傳ふ、菅公の憩はれしと云ふ地は

高さ三間、周圍十餘間の兀たる一堆をなし、俗に**菅相塚**と云ふ、眺望甚だよく、山腹に**蹉跎の池**あり、峽を**蹉跎谷**と稱へ初夏の候、青葉かくれに杜鵑の聲を聞くべし、池の水落ちて蹉跎川をなし寐屋川に注ぐ、又此附近一帶に松樹多ければ秋季松茸の名所として知らる、香里停留場より右方に近き小丘は、嘗て京阪電鐵會社の經營により香里遊園地と稱へて遊覽の設備を整へありしが今は悉く撤廢して枚方遊園地に移したり、法華宗の古刹にして日隆上人の舊址を有する本嚴寺は停留場より三丁にあり。

駒なへていざ見にゆかん蹉跎川に　　俊　頼
枝さしかはす大和なでしこ

光善寺は光善寺停留場より近し、寺は淵埋山と號し大谷派本願寺に屬す

光善寺

寺記に云ふ、文明七年、此地にありし梓原の深淵を埋めて方四丁の地を得たり、蓮如上人是れに一宇を建立して淵埋山と名けたるるを以て當寺の草創となすと、其後天文三年同樣の災に罹り、間も無く再建したるは現存の堂宇にして境内に**蛇の塔**あり、蓮如上人此寺を創建の時梓原深淵の龍・美人に化して上人の說法を聽問し、其功德に感じ池を上人に捧げて昇天せり、塔は其遺したる龍鱗を藏めたるものなりと、是れに因み當時を一に梓原

堂とも云ふ。

枚方町は京街道の要衝にして淀川の沿岸に臨みたれば水陸の交通甚だ便に、古來繁華を極めし處、維新以前の發行になる、都道中記に此地の狀況を記して云ふ。

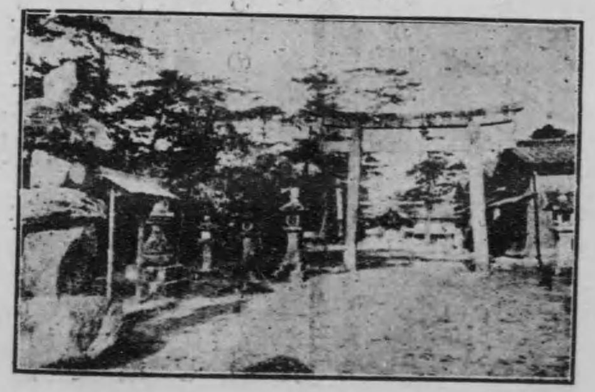
此土地は京都と浪華の通路にて且つは西國諸大名方參勤の官道なるが故に旅籠屋本陣茶店夥しければ晝夜ともに賑はし、町續き甚だ長くして泥町、三矢、岡新町等の小名あり又兩六條の御坊さえありて東は願生坊西を淨念寺と云ふ、船此岸邊に至れば當所の名物たる貨食船夜となく側近く漕ぎよせ、鍵やうのものを小舷に打ちかけ、飯、酒、汁粉、餅なぞを口喧ひすしく船客に罵りすゝむる風あり、是れを俗に喰わんか船と云ひ、昔大阪御陣の節、舟夫が大功ありし恩賞として粗野なる放言は公儀より特に差し許され、往來の船もし風波の難ある時は此船々漕ぎつれいでゝ助くる設ありと聞ゆ云々

往時は淀川に三十石船と稱ふる和船ありて伏見、大阪間水路による唯一の交通機關としたるも、汽車の便開けて以來殆んど其影をとゞめず、其

乘客を顧客とせし當地の名物、喰わんか船も延ひて廢絶の姿となりしが先年土地の有志等之れが再興を計り、年々夏季を限り類似の船を仕立て水上に浮べることあり、電車は其南に沿ひて進み、停留場は町の兩端にありて西にあるを枚方停留場、東なるを枚方東口停留場と云ふ「船をとめるに碇はいらぬ、三味や太鼓で船とめる」の俚謠と共に枚方遊女の名ありし泥町遊廓は今津町の西端堤防に沿へる新開地に移り櫻新地と名けて一廓をなす、枚方停留場より北方數町、伊加賀の梅林は同く東南方五丁にあり枚方遊園地は伊加賀梅林の附近なり鷹塚山及び隣接せる御殿山を併せて設計せる處にして躑躅岩を包み、一水青苔に滑かなるあり疎林落葉して、一徑を埋むるの閑寂あり、松影槎枝として一痕の月を宿すの雅趣あり、眼界甚だ展け、矚望の勝に富みたる等、遊園地としては近

幾稀に見る處と云ふべし、往古天人の降りて水を浴びしと云ふ**天の川**は枚方東口停留場の東南方二丁にあり、川は片町線の頂に述べたる巖船の峽を過ぎて至るも の、水淺けれども急にして清く、歴々砂礫を數ふべし江頭の風光優雅にして殊に納涼、觀月によし、架するに一橋あり、名けて**鵲橋**と云ふ、牽牛星のことなど想ひ浮べて面白しとも床し、是れを渡りて約四丁、山田村字中宮に至れば**百濟王神社**あり、百濟國歸化の王子、阿佐太子及

百濟王神社



び其子孫を合祀する處、太子は推古帝の御宇來朝したる人にて、像及び佛典を厩戸皇子に献じ、皇子之れを嘉納せられて交野郡に邸を賜ひしことあり、其後聖武帝の御代、阿佐の王仁博士と共に文敎及び佛敎に貢献淺からざりしを御追慕あらせられ、其子孫に殊遇を給はりしが、天平九年、阿佐の裔南典を從三位に叙し、其病沒するに及び其邸地に百濟王祠廟及び百濟佛刹を建て給ひしは即ち是れなり、神域高燥、綠樹蠶々として聳え、社殿は九座の末社を列ねて南面す、邸址の礎石今尙荆棘の裡に存し、其遠裔、又此附近に傳ふと。

これやこの空にはあらぬ天の川　光俊

かたのへゆけば渡る船橋

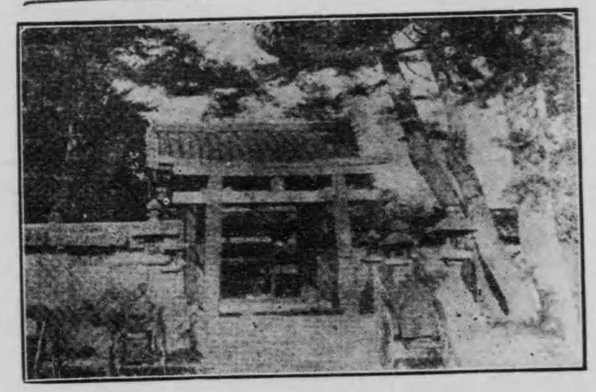
渚が岡は牧野停留場の南方數丁、一に御殿山と稱し西方は枚方遊園地の

一部たり、頂上は平坦砥の如く、往古惟喬親王の亭樹を設け給ひし處と傳ふ、松林の間に**御殿山神社**あり、岡の盡頭より瞰下すれば近く澱江の銀帶を隔てゝ北攝の翠黛畫の如く、遠く京都東寺の塔を望むべし、此附近近年數百株の櫻樹を移植して大に風致を添えたれば春秋の行樂に甚だ佳なり、渚院の址は此の西方にあり、惟喬親王の宮居たりしが、太子宣下の御望み絶え、小野に幽棲せらるゝに際し精舍に改め觀音寺と稱へ、遺愛の**五本櫻**、**駒止松**等を殘されしと雖も今は枯死して見るに由なく、寺もまた廢絶して僅かに其址を傳ふるのみ。

うちつけに渚の岡の松風を　源信明
空にも波のたつかとぞ聞く

和田寺は渚が岡の西、枚野、枚方東口兩停留場の中間なる枚野村字禁野

にあり、弘法大師の開基にかゝり醫王山佛陀寺と稱へ、安置せる木尊は聖德太子作の藥師如來にして初め四天王寺にありしを、文武天皇の皇后御懷胎の時、祈りて御安產あらせられしことあり、大師當寺を建立するに方りて移せし靈佛にして、惟喬親王此地に遊獵して雪を此の寺に避け給ひし時、顯著なる靈驗に耳にせられて堂宇を修築し給ひしが、中古廢寺となりしを楠氏の一族、和田源秀、舊蹟を探ねて再興すると共に今の名に改め、以て明治の初年に傳はりしも維新後再び廢寺に歸し、明治十三年更らに是れを興して現今に至る、靈驗今尙衰へず、妊婦來りて祈願すれば必らず安產すべしと傳へ遠近より賽するもの常に多し、因に此邊一帶の地は往古交野原と稱へし地なりしが、桓武天皇狩し給ふてより一般庶民の私に鳥獸を獵することを禁められしより此名生じ、又一に御狩



野と稱へて古歌に詠ぜられしもの頗る夥し。

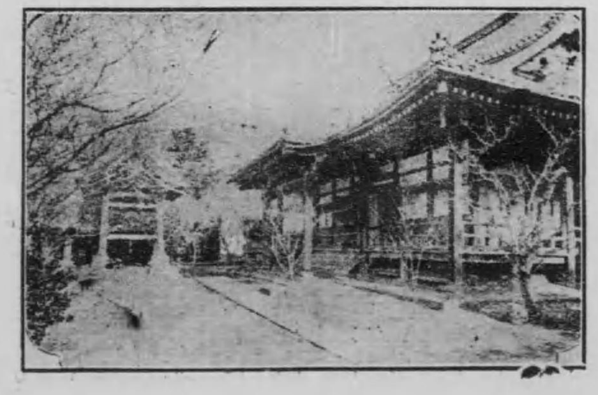
御狩すと楢の長柴をふみくだき
かたのゝ里に今日もくらしつ　　源師頼

片野神社

片野神社は同く牧野停留場の北方約三丁洞が峠は停留場附近の車窓より東方遙かに望むべし、社は垂神天皇の御宇、野見宿禰の勸請にかゝり、後、欽明天皇の御宇、初めて片野神社と名けらる、祭神は建速須佐之男尊、稲田姫命、八島士奴美

命、菅原道眞公の四座にして社殿は元弘、建武の頃兵燹に罹りしも間も無く勸修寺大納言を造幣使として再建されしに天文、文祿年間に又もや兵火の爲めに烏有に歸したりしが慶長七年、豐臣秀頼、大阪城の鬼門除として造營し、社領六十石を寄進あり、城内諸臣の信仰厚かりしが、元和元年、大阪落城と共に一時荒廢に傾きしを、後更らに修築して今日に至ると、繼體天皇の宮居たりし**樟葉宮址**は樟葉停留場より近し、地域六千坪に餘り、老松枝を交へて翠傘をなし、白砂濃かに地に布きて碧水之れを繞り清淨にして、幽閑なり、内に小丘あり、天皇即位の式を行はせられし名蹟なりと傳ふ、今は楠葉祠廟をたてゝ古雅掬すべし、**西遊寺**は橋本停留場より近し、普理山と號す、草創の年月詳ならざるも、東都芝増上寺中興の祖となりたる北條氏康の次子、幼にして佛門に入り、西

國巡錫の途次、足をとゞめたるを以て西遊寺の名をなすと、寺域廣からざるも淀川の流を眼下に望み得て風光甚だ可なり、官幣大社**水無瀬の宮**は、此地より淀川を隔てゝ對岸に近し、明治六年の創營に係り後鳥羽、土御門、順德の三帝を祀る處、地は後鳥羽帝の離宮址たり、古往此地を水無瀬の里と云ひ、水無瀬川は其東方を流る、社殿は壯重にして清麗、境內に數株の櫻樹あり、春時綠樹の間に彩りて甚だ清々しく覺ゆ、是れより尙も進



西遊寺

めば探るべき名蹟の地尠からざるも、東海道線に近ければ「北」の部に述ぶることゝしたり。

電車橋本停留場を發して轆て八幡停留場に至る、男山八幡宮は停留場の前面に接したる**雄德山**の山上にあり、山容香爐に似たるが爲め香爐山とも云ひ、男山八幡宮の鎭座以來男山とも書き又八幡山と名け、山嶺を鳩の峰と稱ふ、古往は貴顯の靈を鎭めし處、地は京都に達する樞要を占め居ることゝて、古來屢々兵馬の馳驅せし巷となり、殊に足利氏より豐臣氏の時代までは關西に於ける戰亂の中心點とも云ふべき觀あり、淀川は電鐵線路を隔てゝ其前を流れ、木津川は分岐して右に繞り風光の美又た甚だ賞すべく、八幡町は其東麓に接し筒井順慶が大兵を擁して羽柴・明智兩軍の旗色を觀望したるによつて有名なる**洞か峠**は同町より南して行

圓福寺

くべし、道は高野街道に衝り、觀應三年宇治合戰以來の古戰場たり、峠の頂上には後醍醐帝の行在所あり、毎朝其所より八幡宮を御遙拜ありしと傳へらる、又其西北に禪學修養所の名ある圓福寺あり、寺は文化四年妙心海門和尚の創建にかゝり本尊たる達磨は聖德太子の作にて初め大和國片岡山達磨寺にありしを、寛正元年、片岡大和守光次、畠山政長と戰ひ、敗れて其地を逃れし時、此像を携へ八幡に來りて一堂に安んせしを後此處に移せ

しものにて日本三達磨の一とす、堂宇頗る宏壯にして明治四十一年、數萬の有志金を以て更らに修理を加へ、境域又極めて靜寂にして幽邃、白雲禪房を繞らせ、清澗天機を鳴らして怜も仙寰にあるの思ひあらしむ。

以上は八幡八幡宮に至る途次の名蹟を述べたるものなれども、本線は八幡停留場の外は途中下車を許さゞるを以て途次の下車は豫め目的の地を定めて乘車券を購ひ漸次乘次ぐことゝせざるべからず。

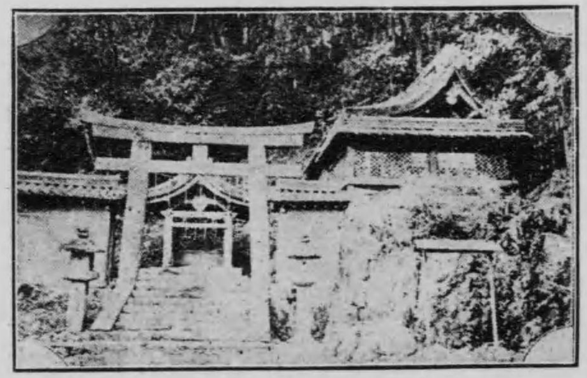
尙天滿橋、京都間に急行電車を運轉するを以て同電車に乘車の場合は天滿橋より八幡に至る途中、枚方東口停留場の外停車せず、乘車の際注意。

八幡詣ふで

官幣大社**石清水八幡宮**は貞觀年間、南都大安寺の沙門にして武内宿禰の後裔なる行敎と云ふ人、常に宇佐八幡宮を崇信せしが或時其社に參籠すること二千日偶々神告を蒙り、勅許を得て此地を卜し勸請せしは當社なりと云ふ、初めは石清水八幡宮と稱せしを明治二年男山八幡宮と改められしが大正七年一月内務省の告示を以て再び古名に復せらる、古來歷朝の御崇敬淺からず、伊勢大廟に亞ぐべきの社として次廟とさえ稱へられ、中にも天元二年、圓融天皇の行幸御一泊あらせられし以來、十八回の行幸ありしと申す、爾來後嵯峨天皇、後龜山天皇の兩帝には畏くも一周日の御參籠あり、文治三年三月、白河天皇行幸あらせられし時、放生會の神幸を行はせられしと傳ふ、寶殿は崇德天皇、保延六年の正月炎上あり、再建の後、建武五年兵燹に罹り、足利尊氏、直義と共に其跡を臨檢して造營し漸く舊に復せしが、現今の本殿は寛永十二年德川家光の修築する處、山麓より坂路を辿ること五丁、漸く社頭に達すれば二の門あり、門は唐破風作りにして石階の上に建ち、左右に廻廊を繞らし、拜殿、神殿は此内にありて神殿は別に**木造の瑞籬**を以て圍み、籬の腰部は組格子となり、**花鳥の彫刻**ありて共に五色を彩り金銀を鏤め

石清水八幡宮

其壯嚴にして艶麗なること言語に絶し、神殿の雨樋は豐公の寄進に係る**黄金の樋**とて世に名高く、燦たる光りは輪奐の美と共に賽者の眼を聳てしむ、一の門外は馬場先と稱へ維新前までは古儀式をなしたることあり左右は蠹々たる老樹の蔭に苔蒸したる多くの石燈籠を以て滿され、神殿の脊後には後見殿と稱する式内の攝社あり、築地の内外には若宮社、若宮殿社、住吉社、氣比社、貴船社、龍田社、一童社、廣田社、生田社、長田社、水分社、竈社、三女社等なり、祭典は毎年九月十五日に執行し日本三大祭の一として頗る壯重を極む、神域甚だ廣く其他探るべき名蹟多ければ先づ中食をしたゝめんとならば賽路、山の半腹眺矚の勝を占めたる地に清洒なる旗亭あり、憩ふて茶を飲むも可、命じて酒食をとるも可なり、價格は比較的高からず。



石清水八幡

―（境内の名蹟）―

太子坂は二の鳥居の傍にありて社頭に通ずる間堂あり、昔は聖德太子を此處に祀れるを以て此名ありと、附近老楓梢を交へて生ひ茂り、秋霜の候、其眺め云ふべからず、**頓宮殿**は東麓にありて八幡宮の行在所たり、毎年九月十五日の祭典には神輿此處に渡御す、是又壯麗なる社殿なりしも明治元年、兵燹に罹りて今は假殿の儘なり、**石清水神社**は當山の地主神に

して天御中主神を祀り、山の東半腹にあり、滾々たる清泉、石間より涌出し、嚴冬に凍るなく、大旱に涸るゝなきを以て石清水の名あり、現今の泉殿及び神殿は、元和四年、時の京都所司代板倉重勝、幕府の命をうけて造營せるものなり、此外幽閑にして森嚴なる神域を探らば**景清塚**、**楠公手植の樟**、**御前の橘**、放生川、細橋等、更らに神域を出ずれば又名蹟の地あり、是又項を更めて次ぎに述べんか。

男山峯よりてらす月かげは　　後鳥羽院
くもらぬ人の心にぞすむ

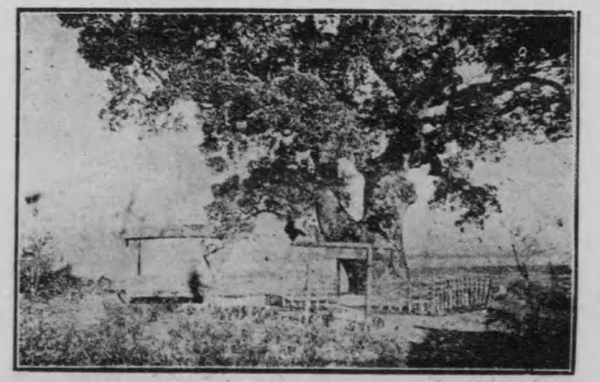
神垣のかけも長閑に石清水　　紀貫之
すまんちとせの末ぞ久しき

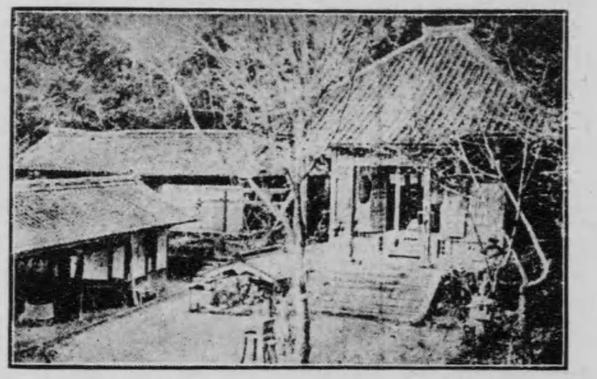
――（附近の名蹟）――

洞が峠は「八幡まで」の項に述べたれば茲には云はず、雄德山附近の名蹟をのみあぐれば**神應寺**は停留場より右方二丁、一溪を隔てゝ雄德山の北麓に對す、寺は律宗にして貞觀元年、行敎和尚、八幡宮を此地に勸請せし後、當寺を建立して神應寺と號け、四宗兼學の道場とせしが足利氏の時、現今の宗旨に改む、寺内に開山和尚の木像、及び豐公の木像を安置す、開山和尚の木像は男山にありしも明治維新の際、神佛分離に就て當寺に遷したるもの、豐公の木像は二代目美彊和尚が秀吉より寺格を進め寺祿を加へられし恩に謝する爲め、其薨去後、自ら刻んで冥福を祈りたるものなりと、又境内に開山和尚の塋あり、堂宇は輪奐の美を認めず と

雖も地は閑寂の境なれば反つて壯重の感を覺え、堂前の眺矚甚だよく、淀川を隔てゝ近く天王山の雄貌に接して天正の戰跡を偲ぶこと深し、楠公手植の樟は八幡宮境内にあることは前項に述べたるが此の境内にも存す、老幹千年の枝を張つて忠臣の偉蹟を傳ふものゝ如し、又大阪の巨商にして一代の榮華を極めし**淀屋辰五郎**の墓も寺内にあり、**杉山不動**は神應寺の領地に屬し、同寺と距つること一丁、寺は行教律師を安んじ、奥谷には不動明

楠公手植の樟





王を安置す、維新前までは八幡宮修覆の都度、公儀より修繕を加へる事とを例とせり、四時參詣者夥しく、殊に毎月三十六、二十八の三日は京阪地方よりの賽者頗る多し、**引目の藏**は附近にあり、大のならざれども四隣極めて幽靜にして盛夏尚冷氣骨に迫るを覺ゆ、**大石塔**は八幡宮頓宮の西裏に接したる地にあり、高さ三間、方一丈に餘り誠に稀大の大石塔と云ふべし、元この處に二基ありしと云へど何日の頃よりか其一を失ひ、今は只だ一

杉山不動

基を殘すのみ、維新前までは男山の社僧により春秋の二季、嚴かりる祭典を執行し來りしも今は絶えたり、**善法律寺**は停留場より南方十丁にあり、後に山を負ひて竹籔を繞らせ、境内に見事なる老楓十數幹あるを以て世に紅葉寺と云ふ、建長年間、男山八幡社務檢校職善法寺宮清、紫前宇佐宮の喜多寺に準じて創立し、東大寺の名僧實相上人を請じて開山となせしに、上人の德化甚だ高きより後深草天皇の御歸依淺からず、大悲

大石塔

觀音の尊像を賜ふとなり、其他本尊には阿彌陀佛を初め千手觀音、寶冠阿彌陀佛、弘法大師作、聖天の立像等は何れも得安からざる名作なりと傳へらる、是れより**正法寺**は近し、同寺は德迎山と號し、清和天皇十一代の後胤、源忠國の本願により、建久二年の創立にかゝり、惠心作の阿彌陀佛を本尊とし、圓誓上人を開祖とす、爾後、後奈良天皇天文十六年勅願所に補せられ、德迎山、勅願寺の勅額二面を賜ひ、德川氏の世には累代朱印五百石の寄進あり、寛永七年、忠國十三世の孫にして當時尾張大納言光義の國老たりし志水甲斐守忠繼、本堂、鎮守、方丈、庫裡、大門等を再建して現今に傳ふ、其壯重にして輪奐の美を極めたる、且つ後庭は崖に迫りて岩石を配し、池泉あり、花樹あり、殊に杜鵑花夥しく、花時碧水を染めて其美言語に絶す、其他古名刹たる八角院、大石良雄が

暫し身を寄せしと云ふ大西坊、今も盡きせぬ戀の物語を殘せし小野賴風の墓及び女郎花の墓等探るべし。

又淀川の對岸には東海道の山崎驛ありて其北邊には古戰場として著名なる天王山あり、其翠巒は遙かに望むを得べく、又柳谷觀音、水無瀨宮、長岡天滿宮等何れも賽すべしと雖も山崎驛よりするを便とすれば『北』の部『京都』までの項に述ぶ。

玉と見む生るを放つ河邊には　清水寺實業
もえてながるゝ水の螢も

宇治まで

宇治は茶所にして螢の名所とは古來人口に膾炙されし處なれども又名蹟に富み、四季の眺めも中々に盡き難し、いざや項を更め八幡以東、宇治までの地を述べん哉。

行路＝同く京阪電車の便によるには、起点たる天滿橋より宇治行直通の電車に乘るをよしとす然らざれば途中乘換の煩あり（尤も往路途次の名蹟を探るとなれば格別）

沿線、八幡までは既に前項に述べたり、八幡以東の停留場及び乘車賃金を先づ記さんに、淀（二十八錢）中書島（宇治行、五條行の分岐なるを以て宇治直通電車にあらざれば此處にて乘換）丹波橋、觀月橋（二停留場

共同額にて四十六錢）御陵前、六地藏、木幡（三停留場行何れも四十六錢）黄檗山、宇治（二停留場何れも五十一錢）天滿橋宇治間往復乘車賃金は九十二錢とす。

――（宇治まで）――

淀城址は淀川の南岸にありて淀停留場に殆んど接す、城は元龜年間、岩成主税助の築く處、後豐臣氏の代、地勢京都への要路に當るより西國諸侯の入京を監視せしむる爲め、秀吉自ら伏見の桃山城にありて淺井氏を此城に置き、以て其内命を傳へしと云ふ、後、德川氏の代に至り伏見城を玆に移して松平定綱を封し、享保年間、稻葉正知をして代らしめ爾來稻葉氏相繼いで明治維新の廢藩に至る、今は僅かに壘壁を殘すのみとは

云へ、城内に稻葉家の祖先を祀りし**稻葉神社**及び玉依姫を祀りし淀媛神社あり、壘上の眺望甚だよく、淀の清流は脚下にあり、是れを隔てゝ天王山を指顧の裡に、北攝の翠黛は其眷景をなして遠く左右に延じ、雲烟に沒するの狀、宛然繪の如し、**美豆の桃林**は、淀停留場の南方、宇治川の兩岸に近く、美豆村にあり、廣さ數丁に達し花時艶妖なる紅雲を浮べて甚だ壯觀なり、停留場より數丁。

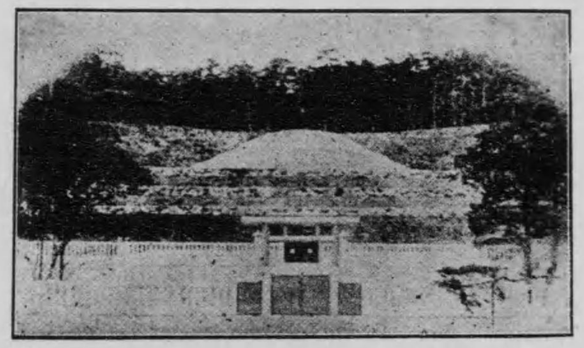
舟おとす淀の川瀨の朝霧に　爲家

たえ〳〵見ゆる岸のかち人

電車は淀の次、中書島、丹波橋、觀月橋の三停留場を過ぎ、御陵前停留場附近に於て京都より奈良に通ずる奈良線と併行して巨椋池の東を繞りて南に向ひ、奈良線は尙も南に、電車は宇治町に至つて止る、此區間以

桃山城址にして、寶壙は其本丸千疊敷のありし邊なりと承はる、土地高燥清淨にして四邊老樹鬱蒼し、閑雅にして極めて森嚴、皇后照憲太后の御陵は其東に並び**伏見桃山東御陵**と申し奉る、大帝の御大喪を行はせられし當時、殉死を遂げて御後を慕ひまいらせし恪勤の名將、乃木大將の爲めに今や或篤志家により御陵に近き邊りに**乃木神社**を造營せんとしつゝあり工成るに及はゞ大將の靈、地下に瞑して更らに御陵守護の任に當り奉るならんか。

古歌に詠せられたる**木幡の里**は木幡驛及び木幡停留場の附近、木幡村にして宇治より京都に通ふ通路にあたり、古往は旅人に馬を貸して渡世とするもの多く、木幡の馬貸しとて今も古名物の一に傳えらる、**木幡の關**址は此の北方、六地藏停留場より近し、昔は京都への出入りを取調べた



伏見桃山御陵

上電車の三停留場は伏見町に屬するを以て項を更め「北」の部に讓り、夫れより以南、宇治までは奈良線と共に併せ述ぶることゝしたり（以下奈良線には驛、電車には停留場として區前す）

伏見桃山御陵は御陵前停留場の北六丁、申すも畏こけれど、明治四十五年七月三十日、悲しくも神去りませし、明治大帝の英靈を長へに鎮めまつりしは億兆臣民の等しく忘れざる處、地は文祿三年、豊臣秀吉が居城を築き一代の豪華を盡せし

る處にして關守の家は今尚其跡を存す、**木幡の陵**は是れより西方、木幡村字金塚にあり、傳へ云ふ、桓武天皇第四の皇子伊豫親王、管絃の道に秀で給ひ、天皇の御寵愛淺からざりしが、大同二年、藤原宗成、竊かに親王に勤めて不企を圖りしも親王從ひ給はずして天皇に奏したり、是れによつて宗成忽ち捕はれしが、詐つて親王の首謀たりし如く誣ゐしより天皇是れを信とせられて逆鱗淺からず、親王を御母と共に河原寺の一室に幽閉せられしに、親王は其冤を雪き給はず、自ら藥を仰いで薨ず、陵は即ち其御遺骸を鎮めし處にして上に五輪の石塔を建つ。

山城のこはたの里に馬はあれど　柿本人麿
かちよりて行く君をおもへば

黄檗山萬福寺は黄檗停留場の東方數丁、宇治村字菟治にあり、奈良線に

ては木幡驛を發して間も無く左方の車窓より林篁の開く處、逶迤たる粉壁の樓閣を見るべし、是れ即ち萬福寺にして、隱元禪師の開基にかゝる黄檗山の本山なり堂塔伽藍は萬治三年の建立になり、總門山門、本堂を初め其他總ての**堂宇は唐朝の結構**を學び、七萬七千坪に餘る境内に朱門碧閣高低相接し、白堊丹壁參差として相列り、林泉の清美又粹を盡して一樹一石悉く同じからず、其雅趣なる風致は到底筆紙を以て能く眞を寫し得べきにあ

黄檗山

らず、洵に本邦稀に見る名刹と云ふべし寺内の**舍利堂**は開祖隱元禪師の遺骸を納めし墓地なり、禪師は明國福州の人、長崎興福寺の僧逸然、時の將軍家綱の命をうけ、明國に入りて禪師を招聘して歸朝す、時に禪師の歳六十三、初めて興福寺に法を開き、次いで崇福寺、普門寺等に道場を置きしが萬治元年江戸に上りて將軍に謁して禪を講じ、諸侯群臣の敎を受くるもの甚だ多く、將軍即ち宇治の地を授けらるゝや、禪師此處に居を構へ、寛文元年、當寺を草創し同十三年、大光善照國師の號を贈られ八十二歳の高齡を以て入寂すと。

巨椋の池は一に大池とも云ふ、電車、淀停留場を發して宇治町までの鐵路は其西北隅の一角より出で北東の沿岸を繞り東南方の一角に至るものにして其廣きこと東西三十二丁、南北二十七丁、周圍三里に餘る、昔は

宇治川の流域こゝに滙して滙浸となり、南の方は淀川に連りしが、豐公桃山城を築く時、長堤を以て湖河を分ち、また伏見の南端觀月橋の南、小倉村より湖の東部を縱貫したる新道を開きたるより湖面は劃して二となるに至れり、而して西部は甚だ廣く、水は洋々として風光頗る可なり、東は區域甚だ狹くして水稍淺しと雖も是れに蓮を培ねたれば毎年七八月の候、是又美觀なるを失はす。

宇治路ゆく末こそ見わぬ山城の
こはたの里を霞こめつゝ

源三位頼政

宇治のそゞろあるき

宇治町は奈良より京都に通ずる要路に當り、古來製茶を以て名ある地にして然も四邊の風色、所謂山紫水明の感ありて、更に風致深く、古往の史蹟に溯れば情緒愈よ横溢すべし、古來雲上墨客の杖を曳き、今は貴顯紳縉の駕を枉げること夥しき蓋し是れあればなり、從つて迎客の設備よく整ひ、旅館には菊屋、萬屋、花屋敷、龜石樓温泉、浮舟等其最たるものとし、宿泊料普通一圓二十錢以上、中食六十錢、以上好みに應じて殆んど際限あらず。

茶摘は宇治の茶の名聲と共に古來人口に膾炙さるゝ處、此の地の茶は明惠上人、此地に茶の木を移植せしに地味に適して其香味天下に謳はれる

と共に爾來培養に培養を重ねて今日に至りしが、今や其產額毎年二百五十萬圓を越え、尙且つ前途益々好望なりと、されば此附近一帶の山野は是れを見ざる處なく、毎年新芽の頃、諸國より入り込む茶摘女の數頗る夥しく、鄙じたれども茶摘歌の聲、優しくも面白し其歌詞に云ふ。

あれに見ゆるは茶摘ぢやないか、わかね襷に菅の笠
寢たやねむたや寢は夜はよかろ摘んで寢た夜は尙よかろ

新緑の薫りを袂にうけて幽かに此調を耳にすれば、和風一過、詩趣自ら湧いて苦茗を啜るの思ひあるべし。

宇治川は其源を近江の琵琶湖に發し、山間の溪谷を縫ふて此の地の東端を東南方より來つて西方に流れ、淀の東北方に至つて淀川に合する清流にして、宇治附近至つて山容開け水勢漸く媛く紫巒を、碧水に映するの

宇治橋

情趣云ふべからず、更らに史蹟を治承の昔に辿れば、源平流れを挾んで相陣し、佐々木、梶原の兩將、先陣を爭ひたる風姿、髣髴として肥前に浮ぶの思ひあらしむ、又源三位頼政の軍、平氏の軍を防がんため板を撤したりと云ふ**宇治橋**は是れに架したり、宇治驛より東方、宇治停留場より西方に何れも近し、橋は孝德天皇大化二年、南都久興寺の僧道登、道昭、勅を奉して始めて架す、長さ八十三間、爾來變亂の爲め屢々破壞されて屢々架し

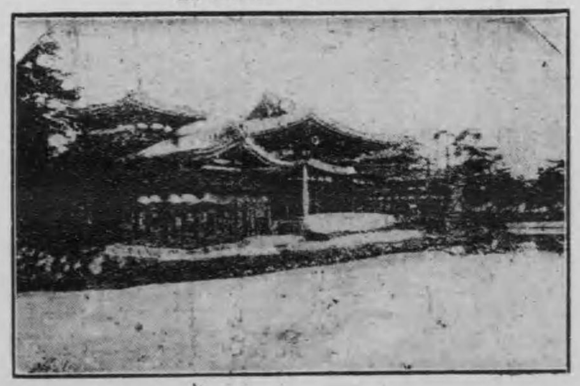
弘安七年、西大寺の興聖上人更らに工を起し、天正六年織田信長羽柴秀吉を工事奉行とし和州三輪山松の、檜材を以て改す、後、秀吉關白の高位に昇り、茶事の風流を嗜むや、橋守通圓をして橋上より清冽の水を汲ましめたる故事により今尚橋の中央に水汲場を設けたり、欄干には唐鋼の擬寶珠二十二基を用ひ、古雅甚だ掬すべし「勢田の手に討ちもらされの螢かな」**宇治の流螢**は銘茶と共に有名なるところ、初夏の暮夜、此の橋上を散策すれば點々水面に徂徠の影を映して詩趣自ら生ず、橋畔に**通圓茶屋**あり、其祖を大敬庵通圓政久と云ひ、古來貴紳の此地に遊びて是處に憩て苦茗を味ひたる、例甚だ多し、茶室には尊朝親王の御軍になる額を掲げ、治承年代の遺物たる鐵の茶釜、一休禪師作通圓の像、利久作豐公の釣瓶、一休の一服一錢の書等は同家秘藏の名寶なり。

家　隆

宇治橋や夜半の川風更けにけり
下ゆく水の音はかりして

平等院は宇治橋の南約二丁、宇治川の西岸に近し始め、左大臣源融の別業たりしが、後、後陽成、宇多、朱雀三上皇の離宮となり、更らに左大臣源雅信の別墅となりしを、藤原道長請ふて其別墅となし次いで宇治關白頼通に傳へ、頼通出家の後、寂覺と號し、是れを寺院に改め平等院と號し永承七年別に壯麗なる一宇を建

平等院の鳳凰堂



て丈六阿彌陀佛の座像を安置して**鳳凰堂**と名く、蓋し其形、鳳凰の兩翼を張りたるに象りたればなり、堂の四方の梁は樂器を奏して紫雲に垂れる五十二佛の像を置き、四壁は安麻爲成の筆になる釋迦八相及び淨土九品の圖を配置し、色紙の觀音經九門品は堀川左大臣俊房の筆なり、四邊の結構丹碧燦爛、殆んど善美を盡して餘すなく、藤原氏全盛時代の遺物として我國美術界の誇たり、宣なり今は特別保護建造物に編入せられ、猥りに内部の拜觀を許されず、堂前に**阿字の池**あり、藍靛の水、廊影逆に映して其趣云ふべからず、其他境内の鐘樓は治承三年の建設にかゝり鐘は無銘なれども**日本三名鐘の一**として甚だ雅を呈し、平等院釣殿の傍にある**扇の芝**は治承三年、源三位頼政、戰敗れて自殺せし地、附近の頼政の**鎧掛松**、**駒止松**等あり、其屍骸は宇治町の最勝院に葬りたりと傳へ

今は其地に大河内信古の修理を加へたる石輪塔建ちたり。

縣神社は平等院の東に隣り、木花咲耶姫を祀る、往古は弓削道鏡を祭神としたりと云ふ、毎年六月五日、有名なる宇治の縣祭りを行ふ、祭典は深夜燈火を滅して渡御する奇習ありて近郷近在よりは云ふまでも無く、遠く京阪神より參詣するもの群集し、電車、終夜臨時運轉するを例す。

浮島は一に塔が島とも云ひ、宇治橋の上流、平等院より近き宇治川の河中にある一小島にして長さ約五十間、地は高かりざるも古來如何なる洪水に遭ふとも水中に沒することなきを以て浮島の名をなすと云ふ、往昔南都西大寺の開基興聖菩薩、宇治橋の荒廢せるを歎き架換せんとせしも水流急にして工事甚だ困難なるより、龍神の加護を得んとて此の島中に高さ五丈、八尺十三重の石塔を築き、綱代禁止の官符をうけて殺生を禁

浮島

じ、綱代を壞ちて島中に埋め、漁人には新に晒布の業を授けたり、然るに塔は其後寶曆六年に破壞して久しく土中に埋りありしが、明治四十年、土地の有志等によつて發掘され、約九千圓を投じて再び建立せり、現今蘆荻簇々たる間に、古色蒼然たり**十三塔**の聳ゆるは即ち是れにして、宇治の勝景、是れによつて更らに一段の趣を加へしものと云ふべし。

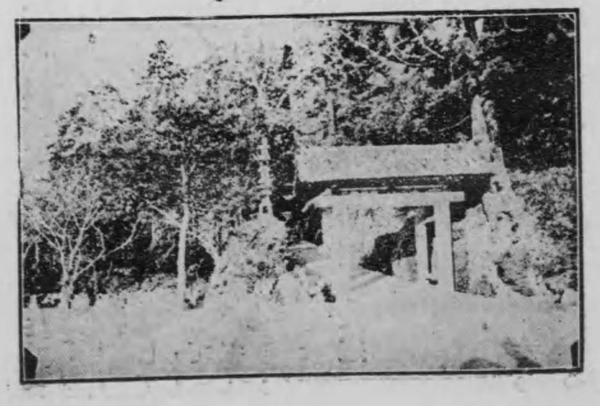
槇島は宇治町の西北數丁、宇治川の西岸に沿ひ、後に巨椋の濤波を遠らし其狀殆

んど島に似たれば古來槇島の里、また槇の島と稱へられ、國風に詠せられしもの尠からず、觀月の勝地として名高し。

まきのしま、さらしかけたる手作りに　宗賢
見えまがふまで鷺ぞ群れ居る

宇治橋を東に渡り、宇治停留場より南に近く**桐原日桁**宮趾あり、應神天皇の廟に造營し、桐原日桁宮と申したり、天皇崩御の後、皇太子稚郎子王位を御兄宮なる大鷦鷯尊に讓り給しし此宮に住はせ給ひしに、御兄宮又辭退して御位を踐み給はず、互ひに相讓りて帝位を空ふすること三年に及ばれ、皇子は御兄宮の御心奪ふべからざるを察し自刎して薨じ給てしより御兄宮深く歎かせられ皇子の御心を汲んで仁德天皇となり給ひ、皇子の御靈を此處に祀りて宇治若宮と號け給ひしは今の宇治神社にして

又舊趾たり、社殿の傍にある御手洗を桐原水と稱へ、神域幽閑にして櫻樹多く、春時枝梢に花を飾るに至らば景致甚だ濃かなり、**朝日山**は、其東南方にありて宇治町よりは東方に當るを以て此名ありと脚下に宇治の清流を繞らしたる山上の眺望甚だ佳なるは云ふ迄も無く、是れを對岸より望めば附近の風光と相對して言外の趣あり、山上には石佛觀音、石造の五重塔、稚郎子の墓碑等あり又半腹には**興聖寺**あり、佛德山と號し日本最初の曹洞



木津川の清流

宗靈場なり、前に宇治の碧帶を控へ、右すれば龜石あり坂を琴坂と稱へ、其兩岸山吹の瀨の名あり、楓樹櫻樹道を擁して左右に枝を交へ、山吹其間を點綴して春秋の眺め言語に絶し、庭園又た頗る幽邃にして佳趣あり、躑躅を以て名高し。

西園寺入道

紅葉ちる山は朝日の色ながら
しぐれて下る宇治の川波

喜撰法師が「我が庵は都のたつみ鹿ぞすむ」云々の歌と共に古來人口に膾炙する

喜撰嶽は此の東方にありて宇治橋より一里半、山上に喜撰の住みしと云ふ洞窟あり、喜撰の洞と傳へて今尚存ず、又西國十番の靈場たる三室戸寺は宇治橋の東北に聳ゆる三室戸山の半腹にあり、天臺宗の僧行表の開基にかゝり隆禪法師中興の祖とす、本尊には八寸二分の觀世音を要置せり、四邊の風光、是又一名區たるを失はず。

右の外、橋寺、斷碑、橋姫社、橘小島ヶ崎等、名蹟の地多く、四圍至る處、殆んど風光の美を以て誇るに足るべけれども無名の地、又見るべきの處無きにあらず、遊者若し時刻の許すあれば河畔に沿ふて散策するも面白からん。

川霧の都のたつみ深ければ
そことも見えぬ宇治の山里

大江匡房

——（西）——

西　大阪より以西姫路を限りとせり、姫路より西方尚探るべきの地尠からざれども一日の旅路としては覺束なからん、又神崎驛より分岐した る福知山驛は『北』の部に讓りて茲には加へず、同驛は大阪より西方に屬すと雖も其進路は北方なるによる。

淡路島は此部に只だ其北端のみにとゞめ、其餘は補遺に記すことゝした り、其島形南北に長く從つて起點大阪よりは西部及び南部に屬する地あるのみならず、同時に一日の遊として難きものあるによる。

以上の如き理由によりこの部に入るべき鐵路を擧ぐれば左の如し。

東海道線の一部　大阪より神戸に至る二十哩三分の區間神戸以西は山陽線に入る

山陽線の一部　神戸驛にて東海道線に接續し姫路に至る三十四哩一分の區間

阪神電鐵線　大坂より神戸に至る私設電車

和田山線　神戸より和田岬に至る二哩八分

兵庫電軌　兵庫より鹽屋を經て明石に至る私設電車

播州鐵道　山陽線加古川驛より南北に延びたる私設鐵道にして南は高砂町に至り北は西脇に延び、其間厄神驛にて三木に至る支線、粟生に北條に至る支線あり

播但線　姫路を起点とし和田山に至つて山陰線に接續するものなれども一日の遊として覺束なきものあれば其一部にとどむ

飾磨線　姫路より飾磨港に至る三哩三分の區間

武庫の海濱

大阪市より神戸市に至る區間、所謂兵庫縣武庫山下の海濱なり、鐵路は院線の東海道線、阪神電鐵線の二線殆んど併行して通じ、東海道線は山手の方を、阪神線は海濱に近く走る、本項は即ち其海濱に近き、阪神沿道を主として述ふることゝしたれども、同線の乘車券は途中下車を許さゝる規定なれば本項により豫め目的の地を定めて行程に上る方宜しからん、乘車賃金は區間制度にして一區片道五錢、外に或る區間により短距離を以て一區とはすものあり、此乘車賃金片道三錢とす、詳しくは各其項に就て述ぶ、尙同線大阪市内の停留場は梅田驛前の外、出入橋、福島野田の三箇所にあるを以て、市内電車の便によるが、或は梅田より東南

方面よりは梅田停留場に、西南方面よりは出入橋停留場に、西北方面よりは福島或は野田停留場の内、何れとも便宜の方を擇んで乘車するが宜しからん、但し乘車賃金は同一なり。

電車大阪の市街を離れて間も無く淀川停留場に至る、地は淀川改修の結果、川幅を廣め、大なる堤防を築き、水害の憂しを除きたる所謂新淀川の東岸にして宏大なる鐵橋を渡れば對岸に稗島停留場あり、共に附近の眺めよく初夏の候、行厨を携へて散策するもよく又秋季虫聲、觀月の勝地として知られ、其他釣魚、網打ち等の好適地たり、其風光車窓より望むべし、是れより以西、大物停留場に至る區間は右方に北攝の翠黛遙かに連り、左方は近く茅海の帆影と望んで、其間豐田沃野あり、春時は菜花風に董り秋時は黄波漣を送りて車窓の眺め甚だよし。

尼ケ崎は兵庫縣東隅の名邑にして櫻井氏の舊城下たりし處、電車は町の北方に沿ふて大物・尼崎、出屋敷の三停留場を置き、汽車は福知山線、神崎驛にて東海道線と交叉して此地に至る、**大物浦**は其東部にして、文治年間、源義經、鎌倉の兄頼朝の忌憚に觸れ、西海に走らんとして部下の諸將等と船出し海上風波の中に平家の怨靈に出遭ひし史話は古來有名なり又尼が崎には元弘年間には秦武文、一宮親王の御息女を倶し奉りて土佐に船出せんとせしことあり、羽柴秀吉、信長の變を聞きて中國路より京師に上らんとする途中、明智の部將、四王天但馬守に追はれて寺院に走り、味噌摺坊主に姿を扮して僅かに逃れしことあれば、佐々成政、關白秀吉の爲めに斥けられ自殺したることある等、史蹟を辿れば思ひ出の種となるべきもの甚だ多し。

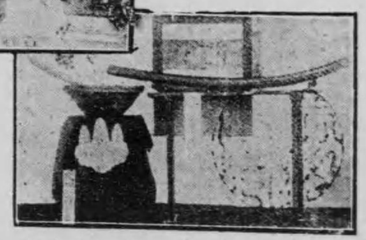
尼ケ崎城址は大物停留場の南方三丁にあり、城樓臺閣は明治維新の際悉く取り壞ちたれば今は其影をとゞめず、址に舊藩主の祖を祀る櫻井神社及び小學校舍を建て纔かに殘濠を存するのみ、**大物主神社**は是れより近く、社は承安年間、平相國清盛、安藝の嚴島に詣でんとて此の浦に來りしに偶々暴風に遭遇せしより遙かに嚴島神社を祈り遂に無難なるを得たるにより一社を營み市杵島姫を祀りしが、後世地名に因みて大物主命を合祀し是れを社名とするに至れりと、社内に辨慶の日和傘あり、毎年陰暦九月三十日に例祭あり、社前に市を開き甚だ賑はし、**貴布禰神社**は町の西方、字宮町にあり、祭神は高祖神にして往古は城内西三の丸に鎮座ありしも元和三年、戸田氏鐵、城を改築の際、貫屬地の内に遷し、正德五年更らに現今の地に遷せり、社記に云ふ、往昔高祖神丸木船に乘り

て此の浦に來り、里人等に向ひ、今後我れを祀らば海魚を與へんと告げて姿を消せしより、里人等歡んで一祠を營みしに魚漁多かりしより誰れ云ふとなく地名を貴海士の幸と云ひ初めしを何時か尼が崎と布轉訛するに至りたるなりと、社格は鄉社編なれども、右の如き關係より附近第一の神社森嚴なり、**本興寺**は同町字別所にあり、神社と崇重し、社殿壯嚴にして神域又た應永二十七年、日隆上人の開基にかゝり細川滿元の創建する處、當寺は寺域八町

四方を有し、堂塔十六坊・七堂三重の寶塔相列び頗る壯嚴を極めしが元和六年、悉く上地の命を蒙り現今の境内に遷さると、現今の堂宇は文政年間の建立になり、開山堂は清盛の造營せし福原御殿の一部なりと傳へ其他本堂、祖師堂、大書院を初め其他甚だ宏大にして壯麗、法華宗の大本山として名刹の名を失はず、寺寶に後奈良帝の綸旨を初め、豐太閤及び德川將軍家よりの寄進になりしもの、古法眼の三幅對、國寶に編入されたる蝶一丸の寶劔等其他一千餘点に達すと、廣德寺は同く別所にあり

賢栖寺と共に古來當町の二名刹と稱へらるゝ處、天正十年の初夏、羽柴秀吉、備中高松にあつて主君信長の變を聞き、急遽軍を纒めて京都に上らんとする途中、此地に明智方の將、四王天但馬守等あり、秀吉を認めて是れを追ひ、其首級を擧げんとするより、秀吉其鋭鋒を避けん爲めに

（左）豊公の危地を逃れし尼ヶ崎の廣德寺



（右）廣德寺の寺寶豊公の遺物

廣德寺に逃れしも寺内狹くして一身を潛むに由なかりしかば次で賢栖寺に至り、（一説に味噌を梢りて難を免れしは廣德寺にして、賢栖寺は秀吉、光秀討伐の宣旨を給はらん爲め、其住職を密使とし京師に走らせしのみとも云ふ）突嗟の塲合頭を刺りて僧形に扮し、僧侶の群に混りて味噌を摺り、辛くも虎口を免れし事蹟は古來有名なり、其因みにより廣德寺には秀吉白筆の下知狀、當時の摺鉢、擂木秀吉の武具、清正の大刀等を存し、望みの者には拜觀を許し居れり、**法園寺**

天文年間、法園和尚の開基になる淨土宗の名刹、天正十六年肥後熊本の城主、佐々成政、秀吉より死を命せられ、怨を呑んで屠腹せし處にて境内に其墓碑を存す、此地釣魚にも甚だよし、貸船あり、客の望に應じて、好漁の適所へ案内す。

思ひやる浦の初島おなしくは　　平清時

ゆきてや見まし秋の夜の月

電車は大阪方面より尼ヶ崎の西端なる出屋敷停留場まで一區とし、片道七錢、往復十三錢、大物、出屋敷間は短距離特定區間にして此の區間は片道四錢、往復七錢、又汽車は東海道線神崎驛にて乘換、大阪よりの乘車賃金神崎迄片道十一錢、神崎經由尼ヶ崎迄十三錢。

武庫川停留場は**武庫川河畔**にあり、武庫川とは殆んど名のみにて、丹波

地方より來る清流は此の上流より漸く細く、廣き川幅も概ね白砂にて、細流は銀線の如き細流は蜒蜿其間を縫ふて海に入る、川底歩むべし白砂に歩を印して下流に辿れば、両岸に翠松參差として列り、其風光奇にして甚だ佳、殊に月明の夜に至つては更らに絶妙とも云ふべし、此の海濱を右に向へば鳴尾にて、鳴尾は謠曲高砂にある「遠く鳴尾の沖すぎて」云々の**鳴尾**なり、月の名所として古歌多し、**百花園**は鳴尾の東方、武庫川の西岸に近し、個人の經營にして公衆の遊園に供へたる處、園内の風致甚だよく、四季の花木珍草を以て滿ち、池あり岡あり是れに亭榭を設けて憩ふに任せ、茶店あり、芳醇を味ふべし。

浦さびてあはれ鳴尾の泊かな　老木集

松風さへて千鳥なくなり

鳴尾には競馬場の設けあり、時に駈馬の嘶くを聞く。

大阪附近よりは鳴尾以西、西の宮まで電車賃金片道十三錢、往復二十五錢。尼ケ崎より西の宮迄片道七錢。

西の宮は古來酒造を以て知られ戎神社を以て名高く、今は海濱の明媚なる風光、夏季の避暑海水浴地としての勝を加へたり、電車は西の宮東口西の宮の二停留場の外、西端稍離れて香櫨園停留場あり、大阪附近より香櫨園迄二區、大物より香櫨園迄一區間とす、但一區は前に述べたる如く、七錢往復十三錢、二區十三錢、往復二十五錢なり、以下是れに準じ三區は十九錢、同往復三十七錢、四區は二十五錢、往復四十九錢の割合とす、又汽車は東海道線西宮驛あり大阪より二十錢。

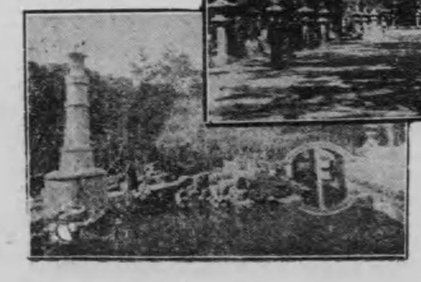
御前の濱は西の宮海濱の別名なり、東は遠く生駒の連峯南に流れ、紀淡

海峡は遙かに雲煙の裡に望み、右に淡路島山、摸糊として淡墨の如く、沖行く船の眞帆片帆、時に黑煙を空に殘して汽船の行き交ふあり、千鳥の影は尠くとも白鷗飛んで一層の趣を添え、其風光甚だ佳に、嘗て勝海舟の築きたりと云ふ**舊砲臺**は大なる形骸を遺して舊時を語るものゝ如く風光甚だ賞すべし、春夏秋の行樂地として最も可、春時は鮮魚の曳網に躍るあり、夏時は避暑海水浴に、秋時は眺矚の妙一層加はり月明の夜の散策、爽快云はん方なし、旅館は阪東屋、丸長等、宿泊料は一夜八十錢以上一圓五十錢、海濱に近き邊に二三の清洒なる料亭あり、階上の見晴しよく價格比較的高からず。

西宮神社は西の宮停留場より近し、創營の詳月年ならざれども、蛭兒神を祀り、世に福神と稱へて毎年一月十日、十日戎と稱し、盛大なる神事

を行ふ、參詣者群をなし「十日戎の賣物は」云々の俚謠に謳はるゝ小寶（俗に吉兆とも云ふ）を商ふ店多く、賽者は是れを購ふて其年の吉兆を祝ふことゝせり、廣田神社及び甲山、西の宮の北方にあり詳しくは「武庫の山麓」の項に述ぶ、松原神社は西宮町字松原にあり、古往津努の松原と稱せし著名の勝區にして萬葉集に「あま乙女いさりたく火のおほくして つぬの松原おもほゆるかも」詠せしは此處なり、**香櫨園**は阪神電鐵會社の設計に

（上）西の宮神社



（下）西の宮神社境内

なる遊園地として一時は諸種の遊覽設備を整へたりしも今は廢園となりて昔日の面影なく、當時の建設物を殘せるのみにて雜草生ひ茂れる荒野の如き觀あり、**六甲苦樂園**は香櫨園の北方二十餘町六甲山脈の一角にあり一にラヂウム温泉と云ふ、園内に湧出する礦泉あり、之れが温浴場を設けしによる、地は高く後に六甲の峻嶺を負ひ前面武庫の平野を隔てゝ茅海に接し、其展望甚だ可なり、旅館には娯樂場を設け、香櫨園停留場よりは山麓まで馬車人車の便あり。

芦屋の濱は打出停留場の海岸より西、芦屋川河口に至る凡そ二十丁に渉る一帶の地にして打出、芦屋の双方に停留場あり、殊に芦屋停留場より電車を降れば芦屋遊園地にして、人工の設備甚だ加へすと雖も自然の雅致は一段に趣深く、芦屋川に沿ひ、綠松の影を縫ふて溯れば**芦屋温泉**あり、地は高燥にして風光頗る明媚の境、春時は櫻花の研を誇り、秋時は楓樹の錦繡を織るあり、夏は綠蔭に涼風滿ち、冬は寒氣嚴ならず、一遊の値あり、大阪附近より電車賃金片道十六錢、往復三十一錢、西宮東口以西よりは同片道六錢、往復十一錢、汽車は又温泉附近に芦屋驛を置き、大阪驛より三等片道二十一錢。

芦屋附近にての名蹟は天神社境内に歌人**猿丸太夫の墓**あり、地は猿丸太夫の居住せし處にして今尚其遠孫同地にあり、猿丸姓を稱へ、邸宅は太夫の時代より傳へしものなりとか、又**業平邸址**、芦屋道滿の居城址等見るべく、芦屋川の上流には**高座の瀧**あり、大ならずとも甚だ雅趣あり、盛夏歩を枉ぐべし、**深江温泉**は芦屋の西、深江停留場の北方に近く、四圍の風光佳にして泉質は婦人病、精神衰弱等に功顯著なれば盛夏の避暑

は勿論、四時療養に來るもの多し、是れより堤上を北に進み、一本の老松を便りに左折すること數丁の地に東光山**要玄寺**あり、法華宗の名刹にして境内眺望の勝に富む、**森の稲荷**は停留場の北方なる山麓にあり、是又矚望に富み社域甚だ神寂たり、又停留場より南方には**踊松**あり、銚子が池は其傍にありて、昔弘法大師が手を洗ひし處と稱へ、池中に片葉の芦生せり、是れより尚も南に向へば白砂の長汀遠く連り、古往芦屋の里と稱へしは、現今の芦屋より此地に至る一帶の地を總括したる名なりと云ふ。

問へかしなあしやの里のはるの夜に　少將内侍
我がすむ方の月日いかにと

岡本の梅林は青木停留場の北方十丁の山麓にあり、電車賃金は芦屋と同

岡本の梅林

額、地は山に據り溪に跨り、廣きこと約二十町、老樹幼木枝を交へ其數一萬、花に紅あり白あり、花時に至れば香雲峰に漂ひ、山頂の風光又甚だ見るべく、價格稍廉ならざるも茶店は元より、梅には似合はしからずも、洋酒・洋食を鬻ぐ店すら設けらる、**八幡瀑**は梅林中の溪流を辿ること暫しにて至る、地を八幡溪と稱へ峰巒重疊し、岩壁峭立したる間に懸り、鞏鞳の響、松聲に和して心氣爽然たるを覺ゆ、神功皇后征韓の時、軍船五百を艤

したる五百崎は魚崎停留場より南方の海岸にして是又風光甚だ見るべく

雀松原は其西方住吉川の附近にあり。

千代〳〵となけども鶴の聲でなし　貞松

雀松ばら百になるまで

住吉神社は住吉停留場の北四丁、東海道線住吉驛の西隣にあり、詳しくは「武庫の山麓」の項に述ぶ。

御影は灘五郷の一にして古來酒造を以て有名の地、御影の濱、御影の松御影山、瑠璃の瀧等は御影停留場よりし一王山**十善寺**は御影町の西端、石屋川停留場より下車し、石屋川の堤防に添ひ河畔を溯るべし。寺は後冷泉の開基にかゝり信覺大師を開山とす、寺脊の山腹に八十八ヶ所の大師を安置し、境内廣濶にして楓樹多く、初夏には庭前の**皐月花**甚だ賞す

べし、詳しくは「武庫の山麓」六甲山越えの項に述ぶ、電車賃金、大阪附近より御影及び石屋川、東明、新在家に至るまで同一にして片道十六錢、往復三十二錢、又住吉以西、新在家に至る區間は短距離特定區間にして片道三錢、往復五錢。

東明停留場附近には東明八幡、弓弦羽神社あり、六甲山脈中の一高嶺**摩耶山**は大石停留場に下車し、上野村を經て登るべし、道程二十五丁、山上に**天上寺**あり、叢路の石階七段、百九十八級より成り、坂路峻嶮にして松杉道を狹めたりと雖も、攀じて寺域に入れば眼界豁然として雄大なる壯觀眼眸に滿つ、寺は大化元年法道仙人の開基になる眞言宗の名刹にして境内に摩耶夫人堂あり、夏季内外人の暑を此處に避くるもの多く、請ふに任せて客顧に宿泊を許し精進料理を以て遇す、正慶年間、赤松圓

心、六波羅の大軍を破りたりと云ふ摩耶の古城址は此の山腹にありて今は一の尾、二の尾の址のみを存せり、敏馬の濱は岩屋停留場より南方三丁にある海岸にして夏時海水浴に適し、附近に社殿の宏壯なる**敏馬神社**あり、境内廣く、老樹枝を垂れて甚だ幽邃なり、天神社は菅公左遷の途次一泊せられたる古址にして五毛の梅林は社側にあり、樹齢幼けれども滿開の候はよく雅客をよび、岡本の梅林と具に幷び稱せらる。

電車は是れより生田川停留場を過ぎて神戸市に入る、神戸市附近の名蹟は別に頂を更めて述べたれば、此の頂は是れにて筆を擱き次きに「武庫の山麓」と題し山手に面したる東海道線を述べん。

武庫の山麓

武庫の山麓は大阪以西神戸に至る東海道線の北邊にして、大阪（梅田）驛の東方に起點を置ける阪神急行電車線は又た此地に延長布設の計劃ありと雖も未だ竣成を告げざるを以て玆には主として東海道線の各驛を起點として述ぶることゝしたり、卽ち其區間の各驛及び乘車賃金は左の如し但途中下車は許されず。

大阪神崎間十一錢、大阪西の宮間二十錢（神崎西の宮間十一錢）大阪芦屋間二十五錢「西の宮芦屋間五錢）大阪住吉間三十錢（芦屋住吉間七錢）大阪三宮間四十錢（住吉三の宮間十一錢）以上往復は各倍額より通行税一錢を引く。

――（甲山登山）――

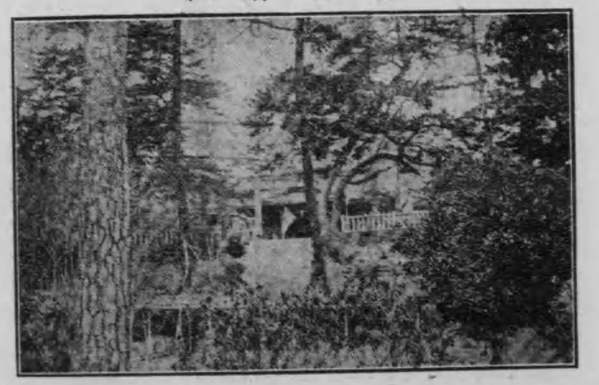
甲山登山は、西の宮よりするをよしとす、山上の眺矚は春夏秋冬とも其趣を異にして面白しとするも陽春の候を以て最も見るべし。

注意――大阪より西の宮までは汽車ならば約二十分餘を以て至るべしと雖も急行列車或は直通列車は停車せざるものあるを以て乘車の際豫め注意を要す。

大阪より西の宮に至る區間、神崎驛より近松門左衞門の墓を訪ぬべしと雖も歸路に讓りて先づ西の宮驛に直進するをよしとす、列車武庫川の鐵橋を渡る頃より右方遙かに溫容の丘陵、恰も兜の如きが平地に冗然と立てるを見るべし、是れ目的地たる甲山にして、甲山の名、其山容によつ

て名けらる、西の宮驛より北方一里、甲東村字神呪に屬し、驛よりは道路平坦にして山麓迄人車通ず、人車賃金約二十五錢位、途次大社村字廣田に至れば官幣大社廣田神社あり、驛より十五丁、社は神功皇后三韓より凱旋せられし時、勸請せられたる古社にして境内廣濶、千古の老樹蔚然として生ひ茂り、甚だ幽邃、近年櫻樹及び躑躅等を增殖せしため花時の風光は一入よく、遠近よりの賽者常に絶ゆることなし。

廣田神社



甲山神呪寺の櫻

甲山は武庫連山の南方に兀然と孤立し、其様殆んど大和三山の耳成、香久、畝傍等と同じくして然も豐容なり、登路嶮ならず、春風一陣山を訪るゝや櫻花爛熳として全山を彩り、秋風山を侵すや紅葉錦繡を纏ひ、遠近の雅俗杖を曳ひて其景を賞す、山上の眺望又甚だ佳にして茅海は漂茫として南に連り、攝河泉の山河一望の裡に指摘すべし、其東面の中腹に古義眞言宗の名刹、摩尼山神呪寺あり、文武天皇の御宇、役小角の草創になり、淳和

天皇の天長五年、皇妃其宮女を具して當山に遁れ、一宇を建立し給へり是れ當寺の興基にして承和二年、天皇行幸ありて近里百町を寄附し給ひ七堂伽藍增坊子院結構壯嚴を盡し、爾後壽永年間に至つて源頼朝之を修築せしことありしが、天正年間兵燹に罹りしより村中に一宇を結び本尊を安置せしを、今より百餘年以前、更らに再建したるは現今の堂宇なり本堂には弘法大師の作になる如意輪觀世音を安置し、觀音堂、大師堂、護摩堂等是れに連り、本堂の上方には辨天、舟玉の祠あり、山間には數條の飛泉ありて一を九想瀧と云ひ、本堂の東南三丁餘の地に懸り、一を大井瀧と云ひ本堂の北八丁餘に、一を乾瀑と云ひ山の北面に、一を鳴瀧と云ひ西南に、何れも泡沫を散して盛夏尚涼風を呼ぶ、其他辨天影向石廣田神影向石、荒神石、白籠石等の奇勝あり、寺域より遠からざるを以

て探ぬべし。

　　奮遊三十年前事　衰老尚來慨古今　天女零蹤芳草舍　帝妃小墜落花深
　　山埋寶劔龍應護　水涸明珠月欲沈　又問紫雲仙餞事　蓬壺人去香誰尋　僧義堂

西の宮附近の地は『武庫の海邊』の項に述べたれば茲には云はず、神呪寺に詣で甲山の奇勝を探りて西の宮驛よりの歸路戲曲の作者として有名なる近松門左衛門の墓に展せんとならば神崎驛にて下車（途中下車規定により復券前途無効、神崎より大阪まで更らに購ふ此金八錢）久々和村の廣濟寺に至るべし。門左衛門は、承應二年長門の國に生れ、享保九年七十二歳を以て易簀されし人、當寺に其墓碑あるは、當時中興の祖、日昌上人、門左衛門の生前、相識の間柄なるにより、其沒後是れを建つと墓は細かなる自然石を以て作り、碑面に『阿篠院穆矣日一具足居士』及

び「一珠院妙中日事信女」と夫婦の法名を刻せり。

神崎驛より南方遙に人家の甍を見るは尼ケ崎市なり、福知山驛是れに通じ汽動車を運轉す、尼ケ崎市は「武庫の海邊」の項に述べたれば同記事參照。

——（六甲越）——

六甲山は武庫山の異名にして海拔三千尺、其山脈延ぶること遠く支峰をなすこと多し、六甲越えは是れを登越して有馬町に至るものにして途次探るべき地又尠からず。

六甲登山は東海線ならば芦屋驛或は住吉驛に下車、阪神電車ならば芦屋停留場に下車するを可とす、就中住吉驛に下車して住吉神社及び途次の

名蹟を探ぬるが最も面白からんか。

住吉神社は驛の西隣にあり、神功皇后三韓より凱陣せられし時、表筒男中筒男、底筒男の三筒男命を勸請せられたるものにして是れに皇后の靈を配祀す、社殿の脊後に釣竿竹あり、皇后長門の豐浦より此地に上陸され、携へられし釣竿を地上に挿し給ひしに後枝葉生じて今日に至ると、線路を隔てゝ北方に丘陵あり**御影山**と稱へ、往古住吉の神、影向し給ひし處なりと傳ふ、岡本の梅林の當驛より東北十五丁、**十善寺**は西北二十五丁、六甲村字高羽にあり、一王山と號し、臨濟宗永源寺派の一派なり信覺大師の開山にして天嘉五年の創建たるも、永祿の兵燹に罹りて一時殆んど廢寺に歸せしを寶暦十一年、呑海和尚之れを再建して稍舊觀に復し以て今日に至ると、境内頗る幽閑にして紅葉の勝地たり、摩耶山又當

驛より登るべしと雖も、六甲山越えと方向を異にすれば項を更めて述ぶることゝし、茲には六甲山に就て述ぶ。

六甲山は全体花崗石より成立ち、樹木甚だ尠く景趣に富む處尠しと雖も山頂の眺矚に至つては近畿地方に冠たるものにて、茅海は脚下にありて池水の如く、紀泉の淡影は點々築山の如く指摘するを得、脊後には兩丹の兩山堵をなして連り、其風光甚だ雄大にして溫度低ければ避暑の地として夏時登攀するもの多く、近年外人の別墅を設けたるもの多し、傳說に云ふ、往昔神功皇后三韓より凱陣し給ひし時、仲哀天皇の先后大仲姫の子、麝坂、忍熊の二王相謀りて皇后を討たんとせしを、武内宿禰先づ麝坂王と其隨臣五名を誅し、其兜首六級を此山中に埋めしより六甲の名を成すに至れりと、山中に**空海の舊址**たる**鷲林寺**あり、空海此の山に登

攀せしに猛獸毒虫出で人を害すること夥しきより、杖とせる櫨の木を以て之を逐ひ、二羽の鳥を置きしが、後勅を奉じて七堂伽藍を建立せしも織田信長の兵燹に罹りて鳥有に歸し今は僅かに其址を存するのみ、清少納言の枕の草紙に「峰はゆづり葉の峰」と記せしは此の東方に聳ゆる支峰にして楪葉岳と稱へ、又摩耶山は西方に聳ゆる峻嶺にして山中に天上寺の名刹あり、住吉驛より約一里半にて至るべしと雖も「武庫の海邊」の項に述べたれば茲に省く。

有馬は「北」の部に述べたる如く、大阪よりは鐵路の便により、容易に至るべしと雖も、健脚家は此の道を辿らば雄大なる山上の風光に接し得て壯快の感深からん、住吉驛より六甲山々頂まで二里餘、山頂より有馬まで約三十丁にて達す、住吉驛を出で北して、山麓に至れば登山者の便を

計る茶店あり、草鞋を鬻ぎ杖を勸め又駕籠を備ふ、駕籠は山上まで一圓五十錢有馬までは約二圓の定めなり、強ち足及ばざるものならずとも之れに賃して往時の旅行を偲び、登るにつれて次第に風趣を添ゆる附近の風光に眼を慰さむるも面白からん、又た徒歩登山の初遊者は茶店に就いて其登路を訊すべし、山半にして脚下を見れば所謂灘五郷の内なる住吉御影の人家廣野に散在し遙かに淡路の島影に接して其快甚だ深し。

郊畿行未了　淡島喚將暨　里見酒家瓦　紅知商明燈　英雄迭經紀　形勢尙飛騰
自笑書生拙　征塵屬登筇

（山陽）

神戸市と其附近

東海道線は神戸市に至つて盡き、山陽線は夫れに接續して西に走る、地は關西地方の要衝に當り、東西二里半、南北一里、南方に大阪灣を擁して一大港灣をなし、東に我邦第一の商都大阪市を控へて常に輸出入の物貨夥しく輻湊し、横濱市と共に本邦二大通商港たり、而して其發達の狀況も横濱市と同じく、嘗ては海濱の一寒村に過ぎざりしも、國勢の發展に伴ひ、維新以後遽かに隆盛を來し、今や戸數十萬を超え、人口殆んど五十萬に達す、然も市の東北に六甲山脈あり、摩耶、再度、鷹取の翠巒は大阪灣より瀬戸内海の水色と映じて風光の美を誇るのみならず、神功皇后の靈蹟、壽永の遺蹟、楠公最期の靈地等、千古の史蹟を包んで既

往の寒村は啻に無味の僻村にあらざりしを知るべし、鐵道は市の中央を東西に貫通して三の宮、神戸、兵庫の三驛を有し、神戸驛は其中間にあり て東海道線・山陽線の接合地點をなし、和田岬線は當驛より發し兵庫驛を過ぎて市の西南端なる和田岬に通じ、大阪よりは又た別に阪神電車の來るあり、同電車は東海道線と殆んど併行して三の宮驛附近にまで來つて西南方に折れ、市内の海岸に近き方面に終點を置ける外、市内には市内電車縱横に通じ、兵庫驛の東方に近く兵庫軌道の電車起點あり て山陽線の北邊を繞り、西に殆んど併行して明石方面に至る等、海陸の交通機關は完備して遺憾なし。

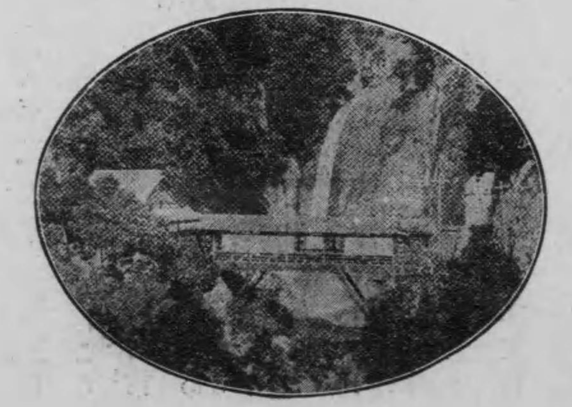
大阪より東海道線によらば三の宮驛迄十九哩三にして此乘車賃金片道四十錢、神戸驛まで二十哩三にして此乘車賃金四十二錢、兵庫まで二十一

哩四にして此の乗車賃金四十四錢、以上往復は各倍額より通行税一錢を引く、又た阪神電車ならば大阪神戸間片道二十五錢、往復四十九錢、神戸發大阪行終發は汽車ならば普通は午後十一時頃、夏季中は同十一時四十分過頃、電車ならば普通は夜半十二時、七月上旬より八月末日迄は終夜運轉、市内電車は一區三錢、往復六錢、外に通行税一錢。

汽車の乗車券は神戸往復を購ひ、三の宮驛に下車して先づ東方より初め市内電車の便によりて漸次西方に及ぼす方順路ならん、即ち三の宮驛を出でゝ東南二丁に**商品陳列場**あり、主として海外輸出の貿易品を陳列す若し是れを見るの要なくば驛を北方に降り、東北三丁の地の**生田神社**に向ふべし、商品陳列場より生田神社へは直路北方五丁、社は官幣中社にして市内中山手通一丁目にあり、神功皇后三韓より凱陣あらせられし後

天照大神の皇妹、稚日女命を勸請して祀り給ふとなり、壽永元暦の戰には平家の陣所となり、湊川の戰ひには新田、足利の交戰地となりしことは**生田の森**の名と共に史上に名高し、爾來幾多の星霜を經、殊に神戸市の發展と共に社域も漸く縮少されたりとは云へ、社脊に鬱蒼たる樹林あり て昔時の俤を偲びに足る、境内に神功皇后釣竿の竹、梶原景季箙の梅梶原の井、敦盛の萩等を存し、例年四月十五、十六の兩日壯重なる祭典を執行す、是れより東北方十五丁に**布引の瀧**あり、社前の東一丁に市内電車生田前停留場あり、此便によれば布引停留場まで賃金一區にして至る、停留場は生田川の西岸にあり、瀧は生田川の源泉にして停留場より其西岸に沿て溯ること二丁餘にして達すべし、削然たる懸崖を傳ふて落つる素簾高さ七十餘間、是れを雌瀧と云ひ、是れより登ること約三丁に

雄瀧あり、共に鞳鞳の聲、四邊に響て頗る幽閑なり、瀑前に亭を設けて酒食を鬻ぐものありと雖も價廉ならず、常に外國人を顧客にする爲めならんか、瀧より歸路につき、再び布引停留場附近に出で、山麓に沿ふて西に迚ること約十五丁に諏訪山遊園地あり、地は市内第一の高所に位し、山を開き工を施したるものなれば其展望甚だよく、市街を脚下に控へて港内の船艦悉く指顧の中にあり、山腹に諏訪大明神の祠、附近に諏訪山温泉あり



布引の瀧

四季、市民の遊覽地として其名著はる、兵庫縣廳は其山下に、三の宮驛は直下約十三丁にあり、其北方に聳ゆるは再度山にして海拔千五百餘尺諏訪山の西方を經て登るべし、山上には古義眞言宗の古刹、大龍寺あり弘法大師の開基にかゝり行基僧正作の如意輪觀世音を本尊とし、本堂奥の大師堂には弘法大師の像を安んじ、毎月二十一日に參詣の信者踵を接す、赤松則實の據りし城址は其前面にあり、再び道を諏訪山の西方に戻り、是れより約十町西して奥平野に出ずれば臨濟宗、妙心寺派の名刹祥福寺あり、釋迦牟尼佛を本尊とし、境内高燥、樹木蓊鬱として風景甚だよし。

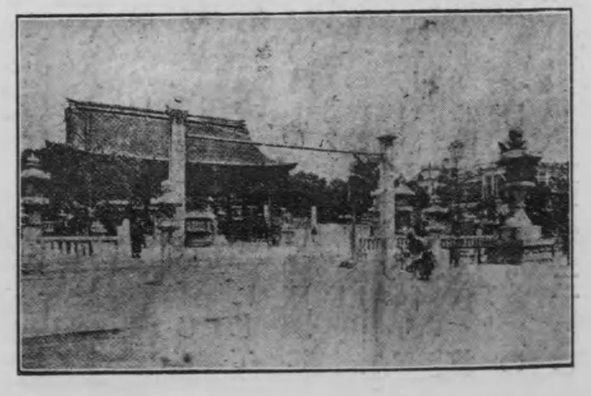
奥平野は神戸地方より有馬に通ずる所謂天王越の要路に當り、市内電車は此の南方に來りて奥平野停留場を設く、是れに乗る迄も無く、線路を

廣殿寺

辿り、楠町四丁目に至れば**廣嚴寺**あり臨濟宗南禪寺派に屬し藥師如來を本尊とす、建武三年、楠正成・湊川の戰に利あらず、一族節黨を率ひて自刄したる名刹、是れによつて寺名よりも**楠寺**の稱を以て有名なり、正成等の自刄せし、無爲庵は今尙當年の俤を遺し、本堂に後醍醐天皇の御寄進になりし正成の木像・甲冑を穿ちたるとと衣冠を著けたると二個を安んじ、寺寶には公の所持せし軍扇・眞軍の書簡等を藏せり、

是れより東南五丁に**湊川神社**あり、電車は通ずと雖も乘換の煩あり、歩むべし、社は楠公が最期の古戰地にして、元祿四年、水戸黃門光圀公、此地を漫遊されし際、楠公が當年の誠忠を想ひ、其遺蹟の荒茫たるを慨して田園古松の影に「嗚呼忠臣楠氏の墓」の一碑を建てられしが、明治維新の後、朝廷又其忠烈の意を彰表して宏壯なる壯殿を營み、公の靈を祀つて別格官幣社に列せらる、初めは寂莫たる地なりしも市の發達と共に熱鬧の衢に

湊川神社



化し、賽者又常に多ければ附近より境内に互りて露店、夜店等相連り四時甚だ賑はし、水戸公の建立になる碑石は正門を入る右手なる松樹の間にあり、毎年五月二十五日は公が戰死の當日なるを以て盛大なる祭典を行ひ、又七月十二日には大祭典を擧行す、電車は正門前を左右に通じ、又附近より丁字形をなして南に分岐せり、左右に通ずるは兵庫線にして市の中央を貫通し兵庫驛前に至つて停るもの、此處より直ちに兵庫驛に趣かんとするには此の西行に乘るべし、市内第一の歡樂地たる**湊川新開地**は社前より西方一町、電車線路に沿はゝ行くべしと雖も歸路に讓り、丁字形をなせる南行の電車に乘れば神戸驛前より相生町五丁目を經て湊川町一丁目にて新開地の熱閙を車窓より望むを得べし、それより數所の停留場を過ぎ、大佛筋停留場に至つて下車(電車賃金は一區即ち三錢)し

右すること二丁に能福寺あり、境内に高さ四丈餘の大露佛を安置し、俗に**兵庫の大佛**とて名高く、附近に露店多く連る、**清盛塚**は此の大佛の西南方に十三層の石塔婆あるは夫れなり、清盛京都に薨ずるや、僧某其遺骨を當寺に齎らして此處に鎮め、後北條貞時此塔を建つと、之れと相對して建てる一基の碑石は經正の琵琶塚と云ふ、元來し道を取り、大佛筋停留場を左にすること間も無く**眞光寺**あり、仁明天皇の御宇、惠蕚法師が唐より歸朝の際、宋王より賜はりし大悲の尊像を安置せる市内屈指の古刹にして門外蓮池の畔に金銅の大露佛あり、眞光寺の如來と稱へ、能福寺の大佛と共に二名物とす、其他此附近、清盛が自ら神號を記したりと云ふ**七宮神社**は北宮内町に、同清盛の勸請にかゝる**嚴島神社**は永澤町に藤を以て有名なる**藤の寺**は江川町にあり、時間の餘裕あらば探るも可

或は是れより直路歩を延すことゝし、眞光寺前を西に向ふこと約十丁、和田岬に至らば風光の美と、壽永の史蹟を探ること深し。

和田岬は神戸港の西南端なる和田崎町南方の海濱にして平氏旺盛の頃、船舶の碇繫に便ならしめんため、平相國清盛の築く處なりと傳ふ、沙洲長く海中に突出し、前に海を隔てゝ遙かに紀泉の巒峰を雲烟の間に望み左に兵庫港を擁し右に白砂青松、遠く須磨の浦に連るありて風光甚だ明媚の地、岬頭には無色不動の**燈臺**及び幕末勝海舟の建設にかゝる**砲臺の廢址**あり、附近に**和樂園**なるありて夏日の納涼によく、掛茶屋等相接して遊客を迎ふ、海濱に一老松あり、其狀笠に似たるを以て**笠松**として其名著はる、其他推古天皇、討夷の爲め行幸ありし時、禊し給ふと云ふ**秡殿堂**、安德天皇皇居を移させ給ひしと云ふ**内裏址**、平相國が萬燈會を行

ひしと傳ふる**燈籠堂**、新田義貞の麾下、本間孫四郎が、尊氏の軍船に遠矢を放せしと云ふ**遠矢の濱**、足利尊氏の**陣屋の址**等探るべし、和田岬線は兵庫驛より分岐して此地に來る。

和田神社は和田崎町の西端にあり、萬治二年、武庫郡、押照の宮洪水の際流出して此處に漂ひ來しを里人等崇敬して社殿を營み生土神とし、又海上鎮護の神として祀りしに始まる、社殿は壯重なる八棟造りにして頗る嚴蕭を極め、毎年五月二十三日盛んなる祭典を行ふ。

武庫の浦和田のみ崎による浪の　　契沖

こゝにもかくる天のはしだて

和田神社々前を北に、舟橋を渡り出鳴の東端に至れば市内電車嶋上町停留場あり、楠公社前行に乗りて鍛冶屋町、西出町の二停留場を過ぎ、湊

町一町目停留場に下車すれば左右に通ずる街路は往年の湊川を埋立てし所謂新開地にして其殷賑なること東京の淺草公園、大阪の千日前と等しく、活動寫眞常設館、諸種の觀覽物、飲食店等軒を並べ四時雜閙の絶ゆる間も無し、時刻早くば好む處に應じて之れ等を觀覽し神戸驛より汽車によりて歸路に就くべしと雖も、神戸發終列車は午後十一時前後なれば注意すべし、但阪神電車は午後十二時を以て普通終電車とし夏季中は終夜運轉する筈なり。

土産物　は瓦煎餅、牛肉等を主なるものとす

明石まで

兵庫以西、明石までなり、須磨、舞子、明石の勝は古來人口に膾炙し、古歌に詠せらるゝ處頗る多く、一の谷、鵯越の名は平家沒落の悲史として千古に傳へ、此間探るべき名蹟勝地甚だ多く、須磨に遊ばんか、一日にして尚飽かず、明石に趣かんか、終日尚去るに忍びざる感あり、されば茲には只だ一日にて巡り得る地點を擇んで項を分ちたりと雖も、更らに歩を延さるゝも可又俺留日を重ねらるゝも可なり、そは啻に遊者の好む處によつて任さん。

鐵道は海岸に沿ふて西に走れる山陽線あり、また兵庫を起點とし、山陽線と殆んど併行して明石町に至る兵庫電軌鐵道あり、故に探るべきの地

は鹽屋迄は兩線殆んど同じければ是又其採否は遊者の意に任せ、茲には兩線に亘つて述ぶることゝしたり（驛は山陽線、停留場は兵庫電鐵線）

――（長田まふで）――

日本紀に記して云ふ「神功皇后新羅を討ち、翌年凱旋して難波津に來るとき、御船俄かに進まず、占ひ問はしむるに事代主誨へて曰く、我を御心の長田の國に祀れと、乃ち葉山姫の第七媛をして祭らしめたり」云々と、**長田神社**は即ち夫れにして、長田停留場に下車すれば北方稍隔てゝ其社殿を望むべし、地は古往、長田の里と稱へられし一の名所たり、官幣中社にして事代主命を祀り、社殿の壯重なるは云ふ迄も無く、社域森嚴にして境内に村上天皇御寄進にかゝる石燈籠、華表に掲げたる小野道

長田神社

風の筆になる額面等を初め、其他神寶として古代より傳はりし器物甚だ多く納む當社は俗に運の神と稱へ、一月一日は勿論、毎月一、十五の兩日は福運を祈るもの雲集して終日絶えず、昔源平の役、父に代つて討死せし**平成章の碑**は此の社前に近き小平六池の東畔にあり、又其從者として之に殉せし監物太郎頼賢の墓は其北方に、其他三位通盛の塚、木村源五重章の墓等を初め、古墳附近に散在し何れも源平の戰に名ある人のものなりとは推

すべくも、殆んど磨滅して何人の墓なるや見分け難きもの多し、**匂の梅**は停留場の東約八丁、池尻村にあり、昔菅公筑紫に左遷の時、和田の泊に順風を待ち給ひしが、梅が香を慕はるゝの餘り訪れしと云ふ木にして今尚存し、其南方に金剛山**寶滿寺**あり、今は衰頽に傾きしと雖も、僧空海の宋より歸朝後第一に創建せし眞言宗の道場にして建武年間、足利尊氏深く信仰して殿堂を建立し、當時は七堂伽藍の壯嚴なる眼を眩する許りなりしと、

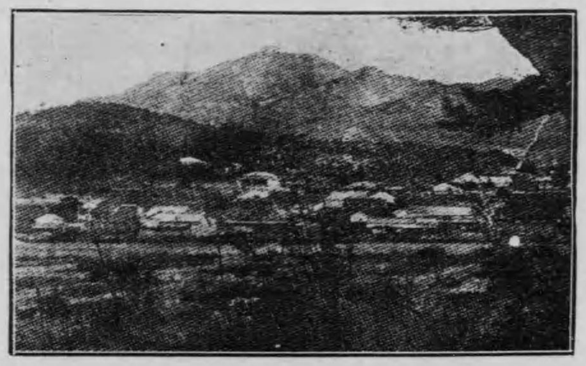
匂ひの梅

是れより西南方に大堂、松月庵、腕塚等あれども鷹取驛よりする方利便なれば「鷹取の海邊」の項に讓る。

雨露もめぐみあまねき時にあひて　古歌
長山の里に早苗をとるなり

――（鷹取の翠巒）――

鷹取山は長田神社の西北に聳ゆる嶮嶺にして一に神撫山の名あり、神功皇后三韓より凱旋し給ひし時、始めて登臨ましませしによる、登路は長田社畔よりすべし、山頂まで十八丁、山は高けれども坂路嶮ならず、山頂は群峯の上に秀で回顧の展望甚だ佳、兵神の全景は脚下にあり、茅海は鏡の如く、淡路島は指顧の間にありて呼べば答ふるが如し、山中に稲



鷲取山の遠望

荷の祠ありて毎年三月十八日祭典を行ふ源平の戰に源義經、鵯越の嶮を下りて平氏の虚を衝きたりと云ふ**鵯越**は其東北方にあり、臨濟宗の名刹、帝釋神撫山**禪昌寺**は其南麓、板宿村にありて西代停留場より北方約十丁、寺は延文年間、月庵宗光禪師の創建にかゝる處、初め鷹取山腹にありしも、後、今の地に遷すと、山門は左甚五郎の作にして門扉は鶯張と稱へ開閉する毎に鶯聲の如き響きを發す、寺域は甚だ幽寂を極め、**楓樹**多ければ兵神

地方に於ける**紅楓の名所**として名高く、庭内には禪師の宋より持歸りしと云ふ江南桂及び楓樹あり、什寶中狩野永德筆、紅葉の圖を畫きたる杉戸、雪舟の筆になる羅漢、晁殿司筆の十六善神等特に名あり、是れより北數丁に那須與市の墓あり。

清時不用問桃源　携酒來尋紅葉村
漫擬當年狂杜枚　青尊相對到黄昏　伊藤南畝

——（鷹取の海邊）——

山陽線鷹取驛にて下車、大阪驛より二十三哩五、一時間餘にて達す、乘車賃金三等片道四十八錢、二等片道八十六錢、三等往復賃金九十五錢、二等同一圓六十八錢、但し急行及び直通列車は當驛に停車せざるを以て

乘車の際注意を要す。

鷹取の海濱は驛の南方に近く眺望武庫の海濱に似て更らに趣を異にするものあり、夏季此地に**遊泳場**を設け、兵神地方より子弟の來り學ぶもの甚だ多く、殊に此の附近探るべきの地亦尠からざるを以て、遊者は先づ鷹取驛に下車して附近の名蹟勝地を巡り、海岸に沿ふて漸次歩を西に進め須磨に至つて源平の古戰場を偲び或は名區を探りて須磨驛より乘車歸途に就くか或は列車發着時間の都合にて兵庫軌道にて歸途に就くも宜しからん、鷹取須磨間の徒歩行程は半里餘、鐵道による哩程は一哩四、大阪より須磨迄の乘車賃金は片道五十一錢、急行列車は須磨驛に停車せざるものあり、但し須磨驛發大阪行終列車普通午後十時半過頃、夏時は同十一時廿分頃にあり。

鷹取驛の南方海濱に毎年夏季海水浴客の來るもの多し、驛の東方數丁**駒ケ林**に大堂あり、本尊は往古海中より出現せるものなりと云ふ嘉應承安の頃、平家の某夫人、子なきを憂ひ此の觀世音に祈願をこめしに滿願の日より懐姙して男子出生せしかば、子安觀音と崇めて平氏一門の信仰淺からざりしと傳へ、今尚阪神地方より子なき婦人の參詣するもの常に多し、毎年一月十五日、此の堂前の海濱にて**左儀長の古式**を行ふ奇習あり式は證樂上人の遺法にして一村の壯丁隊を組んで東西に別れ、互ひに鬼に擬したるものを擔ひて勝敗を決するなり、皐月花を以て有名なる松月庵は大堂より近し、俗に「**さつき寺**」と稱へ庭内に皐月花多く、花時眞紅の色を染めて甚た麗はし、世俗薩摩守忠度の塚と稱する「うね塚」は此の南方なる濱手にあり、其北方に三河塚、又西に歩をうつして野田村

に至れば首塚と呼ぶものあり、源平時代に陣沒せし人の墓ならんも是れを審かにするに由なし。

是れより海岸に沿ふて西に向ひ、妙法寺川を渡れば間も無く**須磨の浦**なり、須磨附近の風光明媚にして優雅なるは古來人の知る處、加ふるに源氏の君、行平の風流、平氏が槿花一朝の露と消えし壽永の跡を想へば自然の勝景に史的の趣味を添えて、そゞろに懷古の情に堪えがたきものあらん。

須磨の浦

須磨寺

綱敷天神は其途次にあり、菅公左遷の途次此浦に船をとゞめしに漁者纜を卷きて敷物となし遷座の用に充てたる古蹟なりと云ふ、是れより須磨驛迄西方五丁、又天神社より北、國道に出で菖蒲小路に至れば**松風村雨堂**あり、行平卿謫居の遺跡とす、**須磨寺**は須磨驛の北方八丁、兵庫電軌、須磨寺停留場より近し、驛前より電車の便によるを得べし（電車賃金四錢）寺は上野山福祥寺と稱へ、天長二年、和田の海底より出現せし聖觀世音ありしが

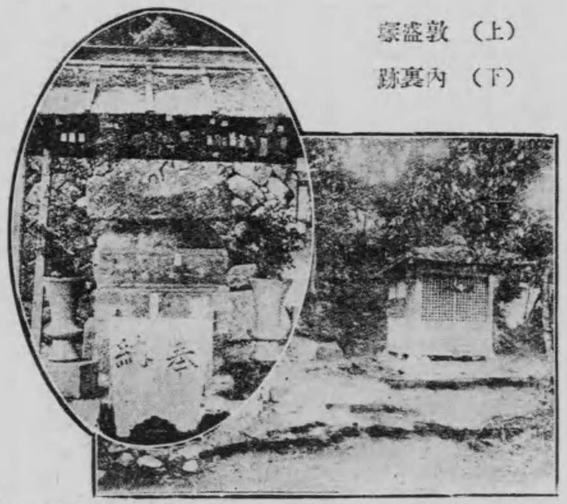
光孝天皇、其霊驗の顯著なるを聞し召され、仁和二年勅願として草創されしは當寺なりと、後、源頼政諸堂を再建し、豐臣秀頼再び造營して今日に傳はる、維新前までは十數宇の堂宇連り著名の巨刹なりしも、今は其二三を存するにすぎず、山門の仁王尊は運慶父子の彫刻にかゝり、梵鐘は壽永の陣鐘に用ひしものなりと、中門には馬盥の額を掲げ、本堂の前には若木の櫻あり、辨慶の制札を掲げしと云ふ有名なる櫻は是れなり寺内は四國八十八箇所、義經腰掛松、琴柱松、神功皇后釣竿竹、敦盛塚等あり、又た寺寶には敦盛の青葉の笛、高麗笛、敦盛赤旗の名號、母衣絹の名號、敦盛幼時の手跡、慶辨が若木櫻に掲げしと云ふ制札等其他種々あり毎月二十一日には參詣者多く、特に三月、八月は衣更なれば其數實に數萬を下らずと、境内に須磨遊園あり、維新以來寺運の日々に衰頽

に傾くを慨して時の住職某、之れが維持策を講じ、有志を計りて二十餘年以前、境内の荒蕪地を拓き櫻樹を植えしが、是れ即ち現今の遊園にして櫻樹は生長して今や櫻林とも云ふべく、是れに添ゆるに數百株を以てしたる梅林あり、運動場あり、地は廣茫にして雅趣を有し、春風秋月共に頗る佳を極め、然も尚園内の擴張を計るべき企圖ありと云へば遊園は軈て一大公園と化するに至らん。

須磨寺の門前に賴政藥師あり、往古は大

現光寺

伽藍なりしも荒廢に歸せしを以て源三位頼政再建せしより此名ありと、例年正月に追儺の古式を行ふ、光源氏の舊跡を稱ふる**現光寺**は須磨寺の西南方にあり、門前に芭蕉の「見わたせばながむれば見れば須磨の秋」の句碑を建つ、**一の谷**は須磨驛の西七丁、驛前より電車四錢（須磨寺よりは二區に互るを以て七錢）地は壽永三年、平氏の一門、安德天皇を擁して籠りし時、假皇居を設けたる處にして其遺址は内裏址と稱へ谷の上にあり、其西方を二の谷と云ひ九郎判官が平氏の不意を襲ひし坂落し、岩石落し等の嶮を有する**鐵拐嶽**は其奥に、又二の谷の西方に三の谷あり三の谷の西に近く高さ一丈餘の五輪の石塔は世に**敦盛塚**と稱ふるものなれども、一説に此地に戰死せし平家一門の冥福を祈らん爲め北條貞時の建てたはものなりとも云ふ（電車は敦盛塚へも賃金は一の谷と同額）塚



（上）敦盛塚
（下）内裏跡

の附近に此地名物の敦盛蕎麥屋あり以上は汽車によるべき須磨附近の名蹟なり、更らに電車によりて洩れたるを探れば、須磨驛前より東行の電車により板宿停留場（須磨より四錢）に下車すれば北方四丁、大手村に**勝福寺**あり、一條天皇の永延二年、熊野權現の示現により勅願によつて草創せるところ、正觀音を本尊とし堂宇は觀應年間、高師直の爲めに半ば燒かれ、次で永正年間大洪水のため

に全く埋沒せしを其後再建せしものにて境内老樹枝を交へたる間に**梅林**あり、土地高燥にして頗る雅致に富み、又た翠松と枝を接して持尾、稲荷尾と稱する山林あり、持尾は古來月の名所とせられし名區、是れより森林斷續して國道によれば

福寺

證城神社あり、地主神にして祭神は聖靈權現と呼び、紀州熊野より勸請したるなりと、往時は此邊一帶の地、悉く勝福寺の境内なりしと云へば、當時の勝福寺は其盛大にして宏壯なること推するに難か

らず、梅を以て著はれたる清友園、桃を以て有名なる百々園は共に此附近の山腹にあり、花時來遊の好地なり、電車須磨より此地に至る途次、東須磨停留場附近にて車窓より北方近く丘上に和洋折衷の宏壯なる建造物を望むは武庫離宮にして地は觀月の勝地なるより昔、行平郷によつて月見山と名けられし處、元は本派本願寺の別墅なりしを、明治四十一年宮内省に御買上げとなりて離宮に改めらる。

すまの浦や渚にたてるそなれ松　　俊頼
しつ枝は波のうたぬ日ぞなき

――（人丸神社詣で）――

人丸神社は歌仙、柿本人丸の靈祠なり、祠は風光明媚を以て聞えたる明

石浦の北方、一眸に勝區を瞰下し得べき高丘の半腹に祀る、鐵路須磨より明石に至る途次、鹽屋、垂水、舞子の三驛あり須磨、鹽屋の兩驛間に兵庫電車は一の谷、敦盛塚、東鹽屋の三停留場を、鹽屋、垂水の兩驛間に（鹽屋停留場は鹽屋驛の驛前にあり）東垂水停留場を置き、又垂水驛の附近に垂水停留場を設けて垂水、舞子の兩驛間には五色山、和歌山及舞子の三停留場を、舞子、明石間には山田、大藏谷、人丸前、明石驛前四停留場を置ける外更らに延びて明石停留場あり、遊者は其何れを選むも隨意なるも、垂水より徒歩舞子に至る又面白し（但下關行急行或は直通列車は以上の三驛に停車せざるを以て驛内掲示時間表或は旅行案内にても參照）乘車賃金大阪鹽屋間三等片道五十五錢、二等同九十八錢、大阪垂水間三等五十八錢、同二等一圓〇五錢、大阪舞子間三等六十一錢、

同二等一圓〇八錢、大阪明石間三等六十六錢、同二等一圓十七錢、大阪より鹽屋以西の各驛に至る乘車券ならば規定によりて途中二回まで隨意に下車することを得、尙兵庫軌道による乘車賃金は兵庫須磨間九錢、同鹽屋間十三錢、同垂水間十七錢、同明石間十九錢。

須磨より鹽屋に至る途次、前項に述べたる敦盛塚より西方數丁に一小流あり、是れ攝播兩國の境にして芭蕉の「蝸牛の角ふりたてよ須磨明石」の句ありし所、細流清らかにして脛を沒せず徒渉すべし、附近に海水溫浴場あり、鹽屋驛附近は夏季海水浴の好適地、垂水に至れば海神社は驛の傍にあり國幣中社にして一に垂水神社と云ひ住吉明神を祀る、神功皇后三韓より凱陣し給ひし時、御船此沖に至りしに風波起りて航行困難なりしかば皇后親ら齋戒沐浴して社礎を築き給ひしに始まると云ふ、北西

五丁に五色塚あり、一小丘にして一に千壺と稱す、昔仲哀天皇の二皇子麑坂、忍熊の二王、天皇の陵を造營するに擬して神功皇后を討ち奉らんとせし處にて幾百の壺を埋めありしより此名ありと。

垂水町を西に出づれば直路約半里にして舞子の海濱に至るべし、濱は紀淡海峽の潮流此處に舞ひ込むより古往は舞込の濱と呼びしを何日のほどよりか舞子の濱と訛傳せしものなりとか、後に丘陵を負ひ、前に瀨戸内海を隔てゝ淡路島と相對し、右に明石の勝區と地を接し左に垂水の濱と連り、風光の美既に粹を拔き、是れに飾るに鬱蓊たる老松あり、樹容又た凡ならず、姿態風致舞ふが如く躍るが如く伏すが如く奔るが如く百樹悉く其趣を異にし、樹下には珠玉を散らす白砂あり、春の松露捨ひ、夏の避暑海水浴、秋の觀月、冬の雪景色共に甚だ賞すべく四時遊客の絶ゆ

るなし、此邊一帶の松林、東西十四丁、南北四五丁を劃して舞子公園とせるが舞子驛のある處は其公園の一部なり。

舞子より明石まで海岸に沿ふて徒行程約一里、此間風光の賞すべきものあれども須磨方面より引續きての徒行は聊か長途に失すべきか、此間汽車によるとならば乘車賃金七錢、兵庫電氣軌道ならば五錢。

明石町は中國街道の要衝に當り、松平氏の舊城下たりし地にして兵庫縣中、神戸、姫路の兩市に亞ぐ繁華の地なり、松平氏の居城たりし**明石城**址は驛の西北三丁の丘山にあり、驛より近く翠松の間に其白堊城壁を望むべし、**人丸神社**は其山續きなる東方の人丸山の半腹にありて柿本人丸の靈を祀る處、驛より東北八丁、往古は明石城のある地にありしを元和四年、小笠原氏築城の際今の處に遷せりと云ふ、社前の風光甚だ佳なれ

ば社格は郷社に過ぎざれども文人墨客ならずとも常に叅詣するもの多く景勝の地に面して建てる茶店數軒あり以て憩ふべく名所地として物價は比較的高からず四時詩嚢を肥すに足るべし、境内の祠前に**盲杖櫻**あり、傳え云ふ、昔筑紫より一人の盲人來りて此の山上に憩ひしが偶ま人丸の社なるを聞き且つは四邊の風光極めて佳なるを耳にせしより「ほの〳〵と誠明石の神ならば我れにも見せよ人丸の塚」と詠ぜしに其目忽ち明きたるを以て大に悅び「我れに賽すべき金子も無ければ今日まで我が力として日夜放さゞりし此杖に眞心をこめて納めん、若し我が心の通するあれば芽を萌きて社前を飾るべし」と手にせし櫻木の杖を植えしに其後不思議にも枝葉生じて花を咲くに至れりと、舊時同社の別當職たりし**月照寺**は其西に並びて建てり、安阿彌作の釋迦如來を本尊とし寺中に諸種の

寶物を藏して一般の拜觀を許し、庭前に赤穗義士間瀨久太夫の植えしと云ふ一大梅樹あり、船形をなして其花は薄紅、其實は八ッ房なるを生じて其名世に高し、又人丸山の東方に權現山なるあり、山上樹林の中に權現の祠あるを以て此名を附す、四邊の風致、海上の眺矚、共に人丸山の右に出でたりと雖も人多く之れを知らざるは惜むべし。

遊者は是れより步を海邊に移せば途次舊藩主の菩提寺たる長壽院、薩摩守忠慶の腕を埋めしと云ふ腕塚、菅公左遷の途次憩はれし靈蹟なる休天神、光源氏の古蹟なる朝顏光明寺、明治十八年、明治天皇此地行幸の際行在所と定められし淨土光明寺、當町第一の大社岩屋神社等の諸名蹟を探るも可なり何れも、人丸神社の山麓より遠からざれば海濱に至る通路より至るべし、海濱には**中崎遊園**あり、翠松枝を連ねし白砂の地にして

前には一條の碧水を隔てゝ畫の如き淡路島近く、四時の風光頗る趣きあり て夏季は海水浴場を設く、此附近より對岸淡路の岩屋に至る日々數回の定期船あり、航程一里八丁、乘船賃十三錢、春夏秋、殊に夏時波靜かなる黄昏、涼風を輕袖に打たせて是れを乘ずれば其快云ふべからず、然も渡らば風景佳絶恰も繪畫の如きを以て名ある繪島あり、一に大繪島或は大和島と云ひ、明石に來るもの風波の無くして是れを探ねざるもの殆んど無しと云ふも可なり、繪島は岩屋浦に近く、岩屋には旅館旗亭等あり、旅館の宿泊料六十錢以上一圓五十錢位。

さよ千鳥ふけゐの浦におとづれて　藤原宗基
えじまが磯に月傾きぬ

播州めぐり

播州廻りとは別府の手枕の松、尾上の鐘、尾上の松、高砂の松、石の寶殿、曾根の松等の名所を遊覽するものにて、汽車は其東端の名所、手枕松に趣くべき便宜驛たる土山驛より西端の名所、曾根の松の便宜驛たる曾根驛まで延長五哩九、殆んど六哩なれども、名所巡りには人車の便あり、又た高砂附近には加古川驛より播州鐵道の便通ずるを以て是れを探るに難からず、此の播州巡りを基礎として先づ途次の名蹟を探らん哉。明石の次驛、大久保驛の北方約一里に觀櫻の勝地たる天郷梅林あり、地は丘陵の半腹に位し、二丁餘歩の畑地を挿んで老幹千餘種枝を並べ、附近眺望絶勝なれば花時遊ぶべく、是れより西方約十丁の地に金崎梅林あ

り、驛より約半里、是又丘上にありて眺望の美は天郷に讓らずと雖も、梅樹は若くして區域狹ければ天郷に比して遜色あるは免がれず、天郷觀梅の途次歩を移すを得ば見るべし、鳥ケ谷溫泉は同く驛の西北方約二十六丁、大阪より大久保驛まで三十六哩二、汽車賃金三等片道七十四錢、往復賃金一圓三十八錢、大阪よりなれば途中下車規定により二回まで何れの驛にても途中下車隨意。

播州名所巡りの東端たる手枕の松は大久保の次驛、土山驛の西南約一里半、別府村なる住吉神社の境内にあり、前にも述べたる如く播州巡りは此處を第一として、漸次西に及ぼすを古來巡路としたれども、其反對の往路により先づ曾根の松より見物して漸次東に及ぼすともそは遊者の任意なり、また旅程の都合によりて東邊なる手枕の松を見殘し尾上以西の

みに止めんとなれば加古川驛より播州鐵道の便により途次の名所を探りて高砂より西に向ひ曾根驛より歸路につくべく、また尾上、高砂、鶴林寺等だけなれば播州鐵道を往復して歸路も加古川より乘車することゝすれば宜しからん、參考の爲め各乘車賃金を述ぶれば、

大阪より賃金

土山まで	三等片道	八十二錢	加古川まで	三等片道	九十一錢
曾根まで	同	一圓	曾根まで	同往復	一圓八十錢

卽ち土山にて下車するとせば乘車券は大阪、土山間の片道を求め、歸途は曾根、大阪間の片道を求めざるべからず、此賃金合計一圓八十二錢となるに對し、曾根驛まで往復乘車券を求むる時は哩程の總計九十二哩二（五十哩以上毎に賃金低減の規定）にして此賃金一圓八十錢となるのみな

らず乘車券購求の手數も一度にて濟む譯なり又加古川驛より南方に向ふ播州鐵道線の乘車賃金（同鐵道は加古川驛にて交叉し、一は南へ、一は北に向ふ）は左に、

加古川より

鶴林寺の便宜驛たる北在家まで六　錢（鶴林寺も播州名所の一なり）
尾上の松の同　尾上まで九　錢（松の所在地は西方に近し）
高砂の松の同　高砂浦まで十六錢（同　東南に近し）

右の如くなるを以て全部を巡覽せんとならば土山或は曾根驛にて人車に賃すべし、人車賃金壹圓（壹圓は規定なれども時期により或は一圓二三十錢も要することあらん）にして此時間約五時間と見れば充分なり、大阪より土山までは約二時間餘、同曾根までは三時間弱（兩驛とも急行列

車は停車せず）故に全部を巡らんとならば曾根迄の往復乘車券により午前七時前後に大阪發の列車によつて曾根驛に下車し、人車に賃して曾根の松、石の寶殿等を經て高砂町に至り、同地にて中食を濟ましたる上、高砂の松、鶴林寺、尾上の松、手枕の松等を探り土山驛に至りて歸途に向ふが宜しからんも、そは遊者の意に任し、茲には舊來の巡路によりて東方より述べ、それと共に各驛よりの哩程を記すことゝしたるを以て西よりするには之れを逆にするべし。

手枕の松は前にも述べたる如く土山驛より西南方約一里半なる別府村の住吉神社境内にあり、社は宏壯と云ふほどにあらざれども神域廣く、松は枝幹蜿蜒として伸ぶること東西實に四十八間、南北十三間を算し、其容姿恰も肱も枕として眠れる人の如くなるを以て其名あり、**尾上の松**は

播州鐵道尾上驛の東南數丁、尾上村なる尾上神社の後にある松林一帶の稱にして其風光極めて佳なること恰も舞子の濱の如く、尾上神社の境内には有名なる**相生の松**、**尾上の鐘**あり、松は一根より雌雄兩種の枝梢出でゝ八方に蔓り、翠葉蓊鬱四時色を變せず、實にや謠曲に云ふ相生の松こそ目出たかりけるの感自ら生すべし、又た鐘は社前なる屋舍の中にありて高さ三尺二寸、厚さ一寸九分、徑二尺五寸、周圍七尺二寸にして巨鐘の名は成し難きも傳說によれば昔神功皇后三韓より持歸られしものにて其年來二千年に近きものゝ如く其音朗々と傳えて餘音は遠く聞ゆ、**鶴林寺**は同鐵道北在家驛の所在地(尾上驛の北方の次驛)鳩里村字北在家にあり、驛より近く天臺宗にして刀田山と號し用明天皇の御宇、聖德太子の建立にかゝる古刹なり、佛殿には太子の頭髮を植えたる太子十六歳

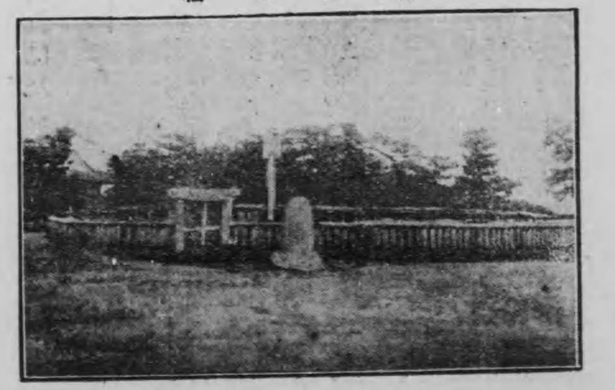
の時の尊像及び釋迦三尊四天王を安置し、創建以來實に千四百餘年の星霜を經たりと雖も未だ嘗て回祿の災に罹りしことなく今尙舊態を存し、鐘樓の鐘は尾上の鐘と等しく稀代の古鐘たり、高砂**相生の松**は同く播州鐵道南方の終點、高砂浦驛に近き高砂神社の境内にあり、社は素盞嗚尊稻田姫、大巳貴命の三神を祀れる古祠にして松は尾上の松に比し枝幹尙よく繁茂したれば一層壯重の感を深からしめ、其傍らに尉姥の祠あり、其古像を埋めし處なりと云ふ、高砂町は其西北方に連り街衢廣からざれども甚だ殷賑の地にして旅館旗亭遊廓あり、憩ふも可、中食するも可なり、物價京阪地方と粗ぼ同じ、**曾根の松**は高砂町を西に出て、直路約一里、曾根村大字御茶屋なる曾根天滿宮の境内にあり、此地に至る途次、伊保村より右すること約半里、米田村の内鹽市村の山腹に至れば**石の寶**

殿あり、祭神は大巳貴命、少彦名命にして一の石殿を神體とし、前に拜殿を設げたり、神體とせる石殿は幅二丈三尺、高二丈六尺を有し周圍に水を湛へ其上に稚松生して一見石殿の池中に浮べるが如し、傳へ云ふ、上古大己貴命、少彦名命の兩神一夜の中に石殿を造らんとせられしも工遂げざるに夜明に及びたれば其儘打捨てゝ去られしは是れなりと、元より取るに足らざる說なりとは云へ、古代の遺物たるは疑ふべくもあらず

曾根天滿宮は菅公左遷の時、憩はれし舊址にして其際小松の苗を手植せられしに爾後次第に繁茂し、天正の頃には其幹一丈八尺の周圍を有せしと云へど其樹は既に枯朽し、其繁茂の頃、實の自ら落下せしもの芽を萌き生長したるは、即ち世に曾根の松と稱ふるものにして未だ百三十年餘の星霜を經ざりとは云へ其幹の太さ三抱へに餘り、高さ三丈にして高し

と云ひ難きも枝稍四方に蔓り、東西に枝を張ること十七間、南北二十間に達し、其風姿誠に靈木の名を失はず、此處より曾根驛まで東北約二十三丁、人車賃金十二錢。

相生の松



費用（曾根驛迄の往復乘車券を求めるとして）一圓八十錢汽車賃金、一圓卅錢人車、三十五錢中食、五十二錢雜費計四圓也。

又人力車に乘らずば播州鐵道線乘車賃金及び、茶店に憩ひ中食

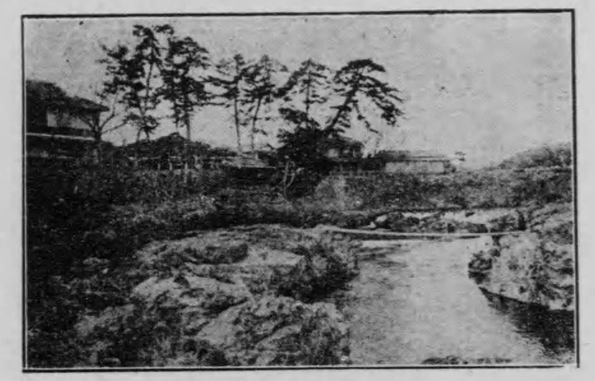
を濟ますとして合計二圓五十錢あれば足るなり。

――（鬪龍灘の鮎狩）――

初夏より初秋に亘りて播州地方に赴くものは忙中に閑を求めて鬪龍灘に遊び、此地名物の鮎漁に都門に知れざる深き興趣を味ふべし、地は加古川驛を南北に交叉せる播州鐵道沿線にあり、遊者は山陽線加古川驛にて同線の北行に乘換へ、十七哩餘を隔てたる播鐵瀧野驛にて下車するか或は尙零哩七を進んで瀧驛に下車すべし、鬪龍灘は瀧驛の東南方約三丁、瀧野驛よりは道程十丁餘を有すと雖も瀧川に沿ふて溯れば溪流の風光甚だ見るべきものあり、加古川驛より瀧野まで乘車賃金片道五十二錢、瀧驛まで同五十四錢、同社線行は鐵道院所屬線各驛より連絡乘車券を發賣

し又鮎の狩漁期中は同社線のみの往復割引乘車券及び同社線割引額を併合せる連絡乘車券を大阪、住吉、三の宮、神戸、兵庫、須磨、垂水、明石等の各驛にて發賣する筈、尤も其發賣する場合は以上各驛に掲示するが例なり。

鬪龍灘は卽ち瀧驛の東南方三丁、瀧川の一區劃にして、瀧川の名既に其實あるところを察するに難からず殊に灘は其水勢一層急湍をなして落下すること殆んど一小瀑布の形をなし、岸に激し巖を嚙み、飛沫雪と化するの狀、是れのみを以て天下の奇勝たるを誇るに足る、加ふるに水は淸冽、盛夏肌を刺すの感を覺えしめ、急瀨を溯る鮎魚は點々として岸上より指摘するを得べく、漁夫は之れを漁るに網を要せず手を濡さず、只だ



鬪龍溪

傍への水中に籠を備へ、手を拱いて待つこと寸時、溯らんとする魚は潑溂と躍つて、自ら籠中に入る、蓋し是れ又確かに一奇觀たり、附近に公園、溫泉を設け、遊客の便に資せん爲め旗亭、ビヤホール旅館等あり。

以上は鬪龍灘を主としたるも附近遊覽の途次は瀧野驛の東方數町にある光明寺山の山腹に眞言宗の古刹光明寺へ賽すべし寺は推古天皇の御宇法道仙人の開山になる處にして頗る幽閑の域を占め大師堂に

安置せる大師の眞影は日本唯一の畫幅なりと稱す、尙其他播州鐵道線西脇（終點驛）の東方三里に清水寺、其次驛野村驛の南十丁に三草山古戰場日岡驛の附近に日岡神社、中津驛の北方に八十の石階、又三木支線三木驛の東二里に志染の岩屋、北條支線法華口の西二里餘に一乘寺等ある筈著者は未だ其地を探ねざるを以て只、其名を記すにとどめ他日實査の上改版の期を待つて詳述することゝすべし、因みに同鐵道各驛は途中下車隨意。

書寫山詣で

書寫山は姫路市の北方約二里の地にあり、大阪より日歸りとしては稍難きも有數の名區なれば特に述ぶることゝしたり。

大阪より姫路まで鐵路五十口哩四、汽車乘車賃金九十一錢、約二時間半にて達すべし、姫路は酒井氏の舊城下たりし處、城址は驛の北方數丁にありて、貞和年間赤松貞範初めて此所に築き、其後山名宗全來り領せしを天正年間秀吉中國の探題となるに及んで此地に移り、後天主閣を築くに至りしが、外壁を塗るに白堊を以てしたるより一に**白鷺城**の名あり、今は陸軍の管轄に屬し第十師團の兵營を設けたりと雖も五層の樓閣は巍然として舊態を存せり、**射楯兵主神社**は其傍に、船場本徳寺は船場地内

町に、姫路公園は其西方にあり。

飾磨海水浴場は姫路市の南方約一里半の海岸にて飾磨線通ず、姫路より三等片道七錢、**增位山隨願寺**は同姫路市の北方約一里、廣峰山の南方にあり、寺は聖德太子自ら其像を巖に刻み給ひしに初まり、聖武天皇天平七年僧行基當寺を建立すと依て太子谷の名今尙殘れり、**書寫山**は是れより西北約一里、共に姫路より播但線に乘換え、同線野里驛にて下車するを便とす、姫路より野里まで二哩四、乘車賃

金五錢なり、同驛より隨願寺まで北二十五丁、途次增位の溫泉あり、また初春なれば白國の梅林を探るも可、書寫山は同驛より山麓まで一里半圓敎寺は其山上にあり西國二十七番の靈場にして當國第一の巨刹とす、寺は一條天皇の御宇、性空上人の開基にかゝり如意輪觀世音を本尊とす辨慶の故事は云はすもがな、山上の風光甚だよく、王院の馬場、女人堂引雲岡、紫雲堂、烏帽子岩、辨慶學問所、如意ヶ瀧等の名蹟勝地探るべし。

鹽屋より以西は大阪より二十五哩以上なるを以て、時間の餘裕あらば途中下車規定により二回まで隨意の地に途中下車するも差支へなし。

——(南)——

南　は起點としたる大阪より南方の地を云ふ、其內の關西本線は市の南部より發したりとは雖も直ちに東に走りたれば「東」の部に讓り、又夫れと王寺驛にて分岐したる和歌山線の分岐點は之又た東に屬したるを以て同線王寺驛以南、五條までは「東」の部に收め、柏原驛より南に延びたる河南鐵道線は長野驛に於て高野鐵道に接續し、其高野鐵道沿線は此の部に述べたるも河南線の起點は「東」の部に起りたるを以て之又「東」の部に入れたり。

此の部に收めたる鐵道線を列擧すれば左の如し。

南海鐵道 本線　難波驛を起點として和歌山市驛に至りて院線和歌山線と接續す

院線和歌山線　關西本線王寺驛にて分岐し五條驛を經て和歌山市驛に至る
山東鐵道　和歌山線和歌山驛附近より發して山東村に至る
加太鐵道　和歌山驛附近を起點として加太村に至る
和歌山水力電氣鐵道線　和歌山市驛附近を起點として和歌山市を南北に貫通し、和歌浦紀三井寺等を經て黒江町に至る
南海鐵道阪堺線　大阪市の南端、南區惠美須町なる惠美須停留場を起點として南に、南海本線と併行して濱寺に至る外、大濱支線、平野支線あり
南海線天王寺支線　關西本線天王寺驛にて同線に接續し、天下茶屋驛にて本線に合す
南海鐵道上町線　大阪市内天王寺西門前にて市内電車に接續し、住吉公園に至る
高野電氣鐵道線　起點は市の西南方、「汐見橋驛」より發し、河内の南部を縦貫して和歌山縣の橋本驛に至つて院線和歌山線に接す

以上各線の起點地には何れも市内電車の便あり、卽ち和歌山線は其幹線たる關西本線の起點地湊町驛前に市内電車停留場あり、南海本線は同く難波驛前停留場、阪堺線には同く惠美須町停留場、南海上町線には天王

寺西門前、高野電車には汐見橋停留場等あり。

尙右各線の内、院線を除ける他は何れも電氣鐵道にして電鐵には途中下車を許さゞるは普通なれども、南海本線は指定驛に限り通常乘車券にて途中下車するも差支へなし、又た同線葛葉驛以南の各驛行は二三驛を除くの外概ね往復割引乘車券なり。

院線にて右區域間は何れも二十五哩以上なるを以て規定により二回迄途中隨意に下車するを得べし。

和歌山水力電氣鐵道線行は南海鐵道難波驛にて連絡乘車券を發賣せり。

堺の汐干狩

堺の汐干狩は堺大濱の汐干狩なり、時季は舊暦の雛節句前後を以て最もよしとす、電車は南海電車阪堺線によらば便なり、阪堺線は前に述べたる如く恵美須町より發するものにして大濱行は堺の市内に入りて大濱支線に入るを以て恵美須町より「大濱行」電車に乗る可し、電車賃金は片道十二錢。

●

恵美須町停留場に近く新世界ルナパークあり、市内歡樂場の一たれども歸途に讓り、電車停留場を發し南霞町停留場を經て北天下茶屋に至れば天下茶屋遊園地は次停留場聖天山と中間の西方にあり、南海本線又此地の西方に驛を置き上町線も天王寺より來る、地は昔豐公堺に政所を置かれし時、之れに通はれし途次憩はれしを以て名くと、茶人紹鷗の住居を構つしと云ふ紹鷗の森は近し、聖天山は聖天阪停留場に近き小丘にして山上に小祠あり、觀喜天を祀り、其眺矚及び附近の風光甚だ佳なり、阿部野神社は高野電鐵の部に讓り、帝釋山は是又帝塚山停留場に近く、一小丘陵に過ぎずと雖も、其眺矚の廣きこと聖天山の比にあらず明治天皇御在世の御時、嘗て陸軍大演習を攝河泉の野に行はれしが此地を畏くも御野立所に定められし御事あり、丘上に天皇駐蹕の碑を建てたり、住吉神社は南海本線住吉公園前、阪堺線住吉神社前、上町線住吉の三停留場あり、其内阪堺線停留場は社前にあれば參詣に最も近し、社は官幣大社にして底筒男、中筒男、表筒男の三神を祀り、初め神功皇后本社を武庫の菟原に建て給ひしを仁德天皇此處に移し給ひ、後世神功皇后を配祀し

て四座となれり、社殿の構造は本邦古代建築の第一期に屬し、今は特別保護建造物として一般建築家の注意をひくこと甚だ深し、境内廣濶にして老樹枝を交え、其内夥多の攝社と數百級の石燈籠立ち並び、社前の反橋は古來有名なる處、俚謠あり曰く「堺住吉反橋わたる、奥の天神五大力、おもとやしろや、信心穴から大神宮さんを伏しかがみ、誕生石には石を積む、赤前垂が出てまねく、ゴロ〳〵煎餅、竹馬や麥わら細工やつなぎ貝、買はしやんせ」是れ社内の名蹟及び此地の名物を讀み込みしものにして、何れも探るべし、公園は同社華表前より西方一帶の地にして此邊往時は海岸に臨みたりしも時移り星變りて次第に砂洲をなし遂に今日に至りしものとか、今は海岸は遠く西に距て、園内翠松の影に料亭茶店等立ち並び四季行樂の地として甚だよく、其西端に高燈籠あり、是又

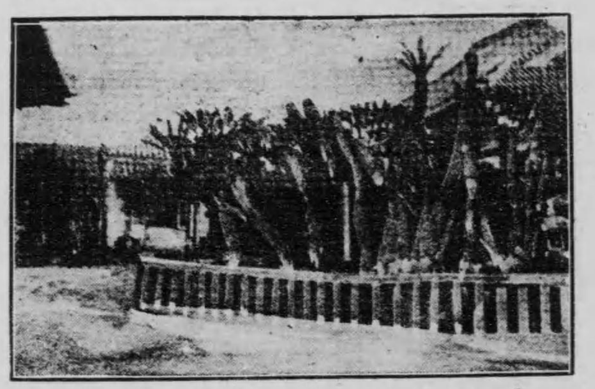
た一種の趣を添え、燈籠は登るべく四邊の風光一目の下に望むべし、名物の麥藁細工、土人形、むし芋など公園内及び住吉町の街路に軒を並べて鬻げり。

松際玲瓏古殿霏　　相携両々賽神歸
素裳如雪靈巫舞　　擊鼓吹笙送晩暉　　元高

住吉神社より南方の地に淺澤小野の舊址を存し、華表前より南へ半丁餘安立町の入口は古往霰松原と稱せし處にして古詠多く、昔は一帶の松林なりしを僧安立開きて町となせしと、曲亭馬琴の羈旅漫錄に志賀崎の一の松、都の島原角屋の松と共に日本三老松の一に稱へられし難波屋の松は社の南方約二丁、安立町の東側なる難波屋の庭中にあり、其幹高からずして枝稍四方に蔓り周圍の延長實に四十間に及び、其壯恰も笠の伏せ

たるが如きを以て一に笠松の名あり。

安立町より直路南すれば大和川を渡りて堺市に入る、堺は古來海外貿易の要津たりし地、今は當年の繁華無しと雖も市坊夥く人口六萬餘を有する泉州地方の大都市たり、生産物中の反物、綴通等は昔より名高く、交通機關は南海本線の外、阪堺線市の中央を貫通して支線を西に岐ち、高野電車は又市の東方に「堺東驛」を置き、市内に探るべき名蹟甚だ多きも其主なるものゝみを擧げんに、神明町には神明社、西本願寺別院、善長寺あり、神明社は伊勢兩大神宮を祀り白鳳年間の創建になる古社、西本願寺別院は一に信證院と號け、市内有數の巨刹にして准如上人作阿彌陀佛を本尊とし、善長寺は其隣坊にして本尊たる十一面觀世音は永正十三年、三好義長此處に陣せし時、靈夢に感じて境内松樹の根本より掘出せ



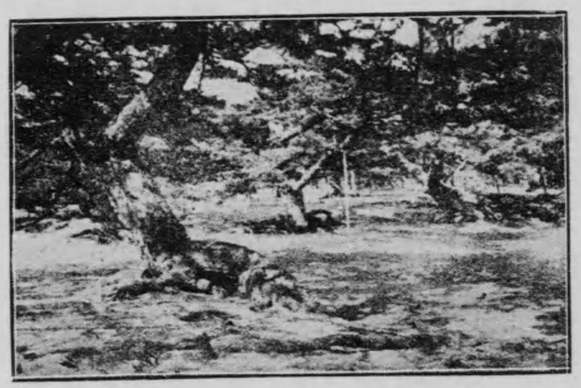
妙國寺の蘇鐵

しものと傳へ、是れによつて寺名を俗に松の觀音と云ふ、宿屋町には成就寺、同じく其南横手に金光寺、金光寺の東方に寶珠院あり、成就寺は日蓮宗にして應永年間の創建になる名刹、金光寺は仁明天皇の御宇茅海より網にかゝりて引きあげし藥師如來を本尊とし一に網道場の名ある名刹寶珠院は舊土佐藩士十一人の墓あるによつて名高し、材木町の妙國寺は永祿五年、日珖上人の開基にかゝる日蓮宗の名刹にて堂宇の宏壯なるのみならず境

内の蘇鐵は古來妙國寺の蘇鐵として人口に傳えらるゝ名木なり、日本七天神の一なる菅公自作の尊像を納めし**菅原神社**は戎の町一丁目に、**本願寺別院**は其北門の東に、向泉寺は市の町に、開口神社・宿院は甲斐町東一丁にあり、其内開口神社は市内屈指の名社にして住吉神社の別宮たり祭神は事勝食勝國長狹尊、生國魂神鹽土老爺の大神を祀り、神功皇后の御宇に鎮座せしものなりと云ふ、後聖武帝の御宇・僧行基の繿垂山念佛寺と稱する寺院を此處に建造せし由緒を以て一に大寺と稱するに至れり宿院は即ち其南門前の地を云ひ、商舗軒を連ね夏時露店等夥しく出でゝ日夜甚だ熱閙の街とす、殊に住吉、大鳥兩大社の御旅所此處に設けあれば毎年七月三十一日及び八月一日の兩社の祭典には神輿こゝに渡御して其雜沓名狀すべくもあらず、神功皇后三韓より御凱陣の時、兜を納め給

ひしと云ふ**胄社**は其石の鳥居の側にあり、**龍谷山祥雲寺**は大町東三丁にあり、禪宗にして寛永五年澤庵和尚の開基にかゝり、方丈の庭に枝葉廣く延びて其狀笠を重ねたるが如き五葉の松ありしを以て一に松の寺と稱へられしも先年枯凋したるは惜むべし、**南宗寺**は市の南方、南旅籠町にあり、禪宗にして龍興山と號し弘治三年大林和尚の開基になりしも天正二年兵燹にかゝり、元和年間澤庵禪師再興せるは現今の堂宇なり、今はまた稍廢頽に傾きたりとは云へ、寺域廣濶にして宏壯なる堂宇山門は當年の盛大を偲ばしむるに足り寺内牡丹花肖拍、一閑齋紹鷗、千利休、曾呂利新左衛門の墓等あり、其附近に海會寺、大安寺、鹽穴寺、少林寺、臨江庵等の名刹あり、又東郊にも探るべきの地尠からざれども高野電車の沿線に近きを以て項を改め「長野遊び」と題して述ぶべし。

大濱公園は堺市の西端、茅海に面せる一帯の海濱にして前面碧海を隔てゝ遙かに淡路島に對し、右には攝播の翠巒あり、左に紀泉の烟山を望んで頗る景勝の位置を占め、園内に旅館酒樓あり、近年阪堺電鐵會社（南海鐵道に合併したる）の設計にかゝる宏壯なる大濱溫泉を築造し、其他水族館、公會堂等あり、殊に夏時は海水浴客の來るもの多く、入江を隔てゝ北方に北波止公園あり、渡船を賃して至るべく、此地附近の海岸汐干狩の名區とて陰暦上己の節句前後に來遊するもの多く殊の外賑はし、また毎年七月三十一日、大濱公園に於て俗に堺の夜市と稱へ、諸國の漁船集まり夜を徹して魚具類の市をなす慣はしあり、此夜電車は終夜運轉し、大阪地方より至るもの群をなす。



濱寺

濱寺海水浴

二條院讃岐の
音にきく高師の濱の仇波は
かけしやそでの濡れもこそすれ

と詠せし高師の濱は現今の云ふ濱寺なり濱寺の名は三光大師の開基したる大雄寺の名殘にて其境域四十六丁に餘れりと、以て其盛時の面影を察すべしと雖も今は寺址として見るべきもの無くたゞ一帯の白砂の地に古松の生え茂り、其狀恰も須

磨、舞子に比すべく、北方大阪灣を隔て丶攝播の翠巒靄駘として望み、西に淡路島山其影を南北に亘つて横え、南に紀伊の連山盡きる處僅かに紀淡海峽をなす、山水の景最もよく、春光暖かなるの時、終日のたり〳〵の穏波あり、夏時は例年大阪毎日新聞社主催の海水浴場設けられ秋季月明の夜は松影明らかに散策に佳、冬の雪景に至りては蓋し佳中の佳とも云ふべけん、南海本線は濱寺驛の外に北方稍隔て丶諏訪の森停留場を置き、阪堺線

濱寺海水浴

は紀州街道に沿ふて二三の停留場を設けたり、今や此濱一圓を遊園地となし、公會堂、紳縉の別墅、料亭、旅館等何れも地を撰んで並び建ち、堺の大濱に比して劣らざる繁華を見るに至れり、此地明治の初年、里人等濱邊の古松を伐採せんとせしことありしが、今は故人なる大久保利通公偶ま此地を過りて其事を聞き。

音に聞く高師の濱の松が枝も
世の仇波は逃れざりけり

と一首の和歌を詠ぜしに里人等僅かに思ひ止り、爾來四十餘年の今日其松によつて勝地と謳はれ遊園となりしは奇と云ふべし、因みに是れが爲め大久保公を德とし其詠ぜし和歌を石に刻して遊園の入口に建てたり。

おきつ波たかしの濱の濱松は　紀貫之

名にこそ君を待ちわたりつれ

濱寺驛より東方約十丁鳳村字大鳥に至れば官幣大社**大鳥神社**あり、其創建の年代詳かならざれども、祭神に日本武尊を祀り、大同年間の古記に既に其社名現はれ、後、式内大社に列せられしより推せば我國屈指の古社たるは疑ふべくもなし、社殿は中世造築せられ、其結構壯嚴を極めて特別保護建造物に編入せられたりしも先年火を失して烏有に歸せしは惜むべし、現今の社殿は爾來更らに再建せし處にして是又壯重たるを失はず、社域廣く老樹鬱蒼たる間に**梅園**あり、清淨なる神域に馥郁たる香氣を放ち、早春探梅の客甚だ多し、祭典は毎年四月十三日に花摘祭を、七月三十一日には神輿の堺へ渡御祭を、八月十二日には例祭を、十一月二十八日には冬季祭を行ひ、殊に花摘祭には堺乳守遊廓の歌妓花摘女となり

て供奉し頗る賑かなり。

同社より尙東すること八丁、八田莊字家原に至れば眞言宗の名刹一乘山**家原寺**あり、地は行基上人誕生の靈蹟にして本堂には上人作の文珠菩薩左脇に釋迦如來、右に普賢菩薩を安置し、其他多寶塔、不動堂、祖師堂藥師堂、鎭守祠等の外、本堂の西方に淸凉院なる一坊あり、境域頗る廣くして幽邃を極め、東方小丘の間に四國八十八ヶ所の靈場に擬したるものを造り、參詣者常に多し、家原城址、和田城址、和田新發意源秀の墓等附近にあり、難波より天下茶屋、住吉公園、堺、龍神に途中下車隨意。

電車賃金、濱寺迄片道十七錢なれども、夏季海水浴開設中は往復割引乘車券の發賣あり（但し同割引券は市内の便宜發賣所にて取扱ふのみにして難波驛にては賣らず）

岸和田まで

濱寺以南、岸和田迄なり、院本にて有名なる信太の森は葛の葉驛の東方信太村にあり、昔千年の古狐、葛の葉と稱する美人に化して人に嫁せしが、嬰兒を殘し去るに及んで「戀しくば訪ね來て見よ和泉なる、信太の森のうらみ葛の葉」と一首の歌を書き遺したる故事は人の知る處、森は古往頗る深かりしと云へど今は縮小して少許の叢林を殘すに過ぎず、**葛の葉神社**は其中にある稻荷の祠にして老樟其側にあり、高きこと百二十餘尺、樹根殆んど十尋に及び、枝葉四方に擴り千枝の樟と稱へて之れを詠める古歌多し、此の東方、信太山に**聖神社**あり、俗に信太大明神と稱ふるは之れにて貞觀元年の創建にかゝる式内の古社なり、次驛助松を過

ぎて大津驛に至れば、當國五社の一たる**泉穴師神社**は驛の東方東穴師村豐中にあり、當國屈指の古社にして天忍穗日尊と拷幡千々姫命の二体を主神とし別に住吉四社明神、天富貴命、佐古麻槌命を配祀し、元正天皇以來歷朝の崇敬淺からざりしと、社寶に聖武天皇の宸翰を初め綸旨其他種々貴重なるものを藏し、境内には楠公寄進の石燈籠あり、古來小兒虫封じの神符を出し、靈驗顯著なりと稱へ下附を願ふもの常に多く、同社の傍に**藥師寺**あり世に穴師の神宮寺と稱へ古往は盛大なりしと云へど今は殆んど廢寺に歸し僅かに其跡を存するのみ、其東北方國府村に**泉井上神社**あり、神功皇后三韓より凱陣の時、茅渟浦より上陸せられしに土地の有司湧泉を奏上せしに皇后即ち叡覽あり御感斜ならず祠を靈泉の上に設け玉の井と名け、此附近を和泉郡と稱へられ行宮を造營し給ひしが、

當國を和泉と云ひしは是れに初まり後人其地に仲哀天皇、應神天皇、神功皇后の三神に三韓征伐に偉勳ありし四十八人の諸臣を配祀てし社殿を營みしは當社にして元は井の八幡、井戸の森八幡或は水内の社と稱へしと、**松尾寺**は大津驛より東方約四里、南松尾村にあり、天台宗にして役小角の開基にかゝり、僧泰澄を中興とす本尊には、小角自作の如意輪觀世音を安置し往昔は歴朝の勅願所たりしことあり、國内の巨刹なりしが根來の兵亂の爲め一時廢頽に歸せしを慶長年間豐臣秀頼再興せしは現今の堂宇なりと、寺寶に古文書多し、施福寺は是より至るべしと雖も高野電車によるを順路とすれば項を更めて述ぶることゝしたり。

岸和田町は岡部氏の舊城下たりし處、地は紀州街道の要衝に當り、海路の便又た惡からざれば水陸共に行通の便ありて市況殷賑を極む、舊城址

は樓閣既に無しと雖も殘濠存して春時遊ぶべし、丘上に岡部氏の紀念碑あり、又城濠の附近には泉南郡役所、岸和田中學校、泉南高等女學校、舊藩士子弟授産場等建ち其南方には式内の古社たる**岸城神社**あり、毎年秋季例祭を行ひ、全町より數臺の山車を出して甚だ壯觀を極む、**蛸藥師**は岸和田町字南町にあり、寺記に云ふ、建武年間一体の地藏尊蛸の奇に御し現はれ給ひしを時の城主和田氏奇異のことに思ひ域内に堂宇をたてゝ尊重せしに初まると、毎月二十四日の緣日には參詣者甚だ多く、特に八月二十四日は大緣日とて近郷近在は元より遠く參詣に來るもの踵を接す、岸和田海岸は濱寺の夫れには元より比すべくもあらずとは云へ、其風致甚だ調ひたれば散策するもよく、又春時より夏季にわたりて蛸釣りを行ふも最も興深し、此邊の蛸は其大さ飯蛸の如くにして甚だ大ならず

釣るには強ち舟ならずとも海岸よりなすを得、普通魚釣の如く餌を要せず技能なくも可なり、特種の漁具（此附近の釣道具屋にあり一個五六錢）に數間の澁緒を附したるを海中に投ずるだけにて足るなり、此地又海水浴に適す、濱寺以南、濱寺、大津に下車隨意。

電車は普通、特等の二種あり、岸和田まで普通乘車券三十二錢、特等は五割増、途中下車は隨意。

——（久米田詣で）——

久米田寺は岸和田驛の東約二十丁、八木村字池尻にあり、行基上人の開基にかゝる古義眞言宗の名刹にして釋迦牟尼佛を本尊とし、文珠、普賢の兩菩薩を左右に安置す、境内甚だ廣くして風光美に殊に楓樹を以て名

あり、**久米田池**は其門前にありて周圍約十丁を有す、行基上人久米田寺を創建の際、橘諸兄の力を借りて掘鑿せるものにして又上人入寂の地たり、古來灌漑に利する處多く河内の狹山池と共に名あり、之れによつて里人等また橘諸兄をも德とし久米田寺の西一丁餘の地に諸兄の塚を建てたり**久米田の桃林**は久米田寺の西方、驛より同寺に至る途次にあり、地域甚だ廣くして花時一帶の紅雲遠く漲り其眺め頗る可なり。

——（牛瀧詣で）——

牛瀧山は名刹大威德寺の所在地にして又楓の名所なり、岸和田より東南約四里途次二里餘東葛城村に大台宗の名刹たる**神於寺**あり、寺は役行者の開基にして光忍和尚の中興とする處、千手觀音を本尊とし、行者の所

持せしと云ふ松虫、鈴虫の二鈴を寺寶として存せり、地は神於山の山腹にありて前面和泉の平野を隔てゝ茅海に對する風光得も云はれず、牛瀧山は是れより尙東南方に向ふべし、**大威德寺**は其中腹にありて是又役行者の開基にかゝり大威德明王と本尊とし脇壇に行者自作の不動尊及び弘法大師作の阿彌陀佛を安置せり、寺域頗る廣大にして幽閑を極め山中に三簾の飛瀑あり其大なるは一の瀑と云ひ高さ四間、二の瀑は同二間、三の瀑は六間にして幅は何れも一間餘に過ぎず瀧としては誇るに足ざる如きも附近の風光と相俟つて一段の風致を添え、瀑の上に臥牛に似たる巖石の横はるあり、牛瀧の名之れによつて生ずと、寺内に糸櫻の名木を初め櫻楓甚だ多く、殊に秋葉霜を頂くの候に至れば滿山錦繡を織りて溪流に映じ其美觀云ふべからず。

春秋の季に至れば山中に茶店を設くるものあり、途次また口腹を滿すべきの家なきにあらざるも到底都人士の口に適すべくもあらざるを以て豫め行厨の用意を調へ行くが宜しからん。

○

小車もつひにとゞめん名にしおはゞ　似

牛瀧山の木々のもみぢ葉　山本利盛

○

白雲埋路幾重々　門外寒流石上松

林鳥相呼山更靜　老僧携鉢下孤峰

水間寺詣で

水間寺は是又泉州の一名刹にして賽者は貝塚驛にて下車すべし、驛は貝塚町の東邊にありて町は岸和田町の南方に殆んど接したる名邑、貝塚御坊の稱ある願泉寺は行基上人の開基にかゝる泉南有數の名刹にて同町字中の町にあり、寺域屬く堂宇又た宏壯なり。

水間寺は貝塚驛より東約一里、木島村字水間にあり、天平十六年、聖武天皇の勅諚により僧行基の開創する處、天台宗にして安置せる正觀世音の尊像は天笠文珠菩薩の作なりと云ふ、古往は堂塔坊宇百三十餘を有し近畿有數の大伽藍なりしと云へど、今は本坊を殘すのみ、されど諸人の信仰は尙衰へず毎年初午及び二の午には遠く北は京阪南は和歌山地方より參詣するもの多く、其他毎年一月三日の千本搗き、六月十七日の十七夜、七月十日の千日祭、十七日の十七夜、八月十七日の相撲會等には近郷近在より夥しく群集して雜踏を極む、堂後に白糸の瀧あり、其風光極めてよし、是れより東方約數丁、西葛城村字木積に至れば木積觀音堂あり、往時は七堂伽藍を有する古刹なりしと雖も中古兵燹の爲めに現今の觀音堂を殘したる外一切烏有に歸し、佛體は同堂安置の聖觀世音、阿彌陀佛を初め、其他行基上人自作にかゝる、精緻なる二十體の佛像を存せり。

電車乘車賃金は難波より貝塚まで片道三十五錢、終電車貝塚發難波行平時は十一時廿分頃、岸和田及び當驛共途中下車驛。

犬鳴登山

犬鳴山は泉州の東南隅、和歌山縣と境を接する所謂泉紀両國の境にあり登山は佐野驛よりするを順序とす、佐野驛は泉南郡中の一邑にして驛は其東邊に接し、貝塚驛の次驛とす、佐野町には大覺僧正の草創にかゝる日蓮宗の名刹**妙光寺**あり、犬鳴山は佐野驛より道を東南に求めて進むべし、途次紀州街道を右に折れること數丁、長瀧村に**蟻通大明神**あり、社は大名持少彦吉命を祀り、村社なれども古代有名にして枕草紙、貫之集に其名著れたり、是れより尚南に進むこと約半里、南中道村字樫井は元和の古戰場として名高く、大阪方の猛將塙團右衛門直之、淡輪六郎兵衛重政等討死の地にして二士の墓は倶に同村入口の路傍にあり、其他是れ

より東方、日根野村に和泉五社の一たる日根神社、式内の古社、比賣神社の新宮寺たりし慈眼寺門の前に一樹の姥櫻あり、稀代の大樹にして枝梢らんか、因みに慈眼寺門の前に一樹の姥櫻あり、稀代の大樹にして枝梢四方に蔓り花時の壯觀人目を驚かすに足る。

以上は紀州街道に沿ひたるものにして犬鳴登山は直路東南方に進むものにして途次熊取村に**熊取野行宮の址**、更に大土村字大木に至れば式内の古社火走神社あり一に瀧明神と云ふ、犬鳴山は此の大土村の内にして佐野驛より山麓まで二里二十丁、山腹に七室瀧寺あり、寺は古義眞言宗にして役行者の開基にかゝり、正平年中志一上人の再興とす、寺記に云ふ昔此の附近に一人の獵師ありしが或日此山に入り鹿を射とめんとせしに率ひたる獵犬頻りに鳴きてやまざるより遂に獲物を逸したり、獵夫之れ

が爲めに大に怒り、腰なる山刀を振つて其犬の首を斬りしに、首忽ち樹上に飛んで巨蛇の咽首に嚙み付き共に地に墜ちたり、曩に犬の吠えたるは云ふ迄も無く巨蛇の樹上より主人を呑まんとするを見て其危急を知らさんとせしも、意達せず反つて我身の両斷さるゝに及で一念凝つて當の敵を倒せしものにして獵夫は夫れと見て、直ちに大に感じ薙髪して此の寺の僧となりしと、境内に犬塚あり、世に當時をワン〳〵寺と稱するは是れが爲めなり、四邊幽邃にして極めて風光の勝に富み、山中の溪谷に両界瀧、塔の瀧、辨財天瀧、小槻瀧、奥の瀧、千手瀧、布引瀧の七瀑あり其容姿悉く異にして各趣を有し、笈掛石、屏風岩、行塲石、四寸岩、天狗松、風穴等の奇巖絶勝又大に見るに足る。

金熊寺の觀梅

金熊寺は泉南地方に於ける觀梅の地として最も名高く、月ヶ瀬に比敵して讓らずとして稱へらるゝの地、元より月ヶ瀬は天下の勝區なれば此語や或は過賞の嫌なきにあらざるも兎も角一日の行樂として甚だ可なり、道は樽井驛より下車して東南方約一里十丁、道路平坦なれば人車通ずべしと雖も花季の乘車賃金甚だ廉ならず殊に都人士と見て不當の賃金を貪るものあれば注意すべし、普通賃金二十錢、また電車は當驛まで片道五十錢。

樽井驛より東南に進み、途次紀州街道を右に折れること數丁、岡村に眞言宗の名刹林昌寺あり、地は四國八十八ヶ所の土を運びて築造せしもの